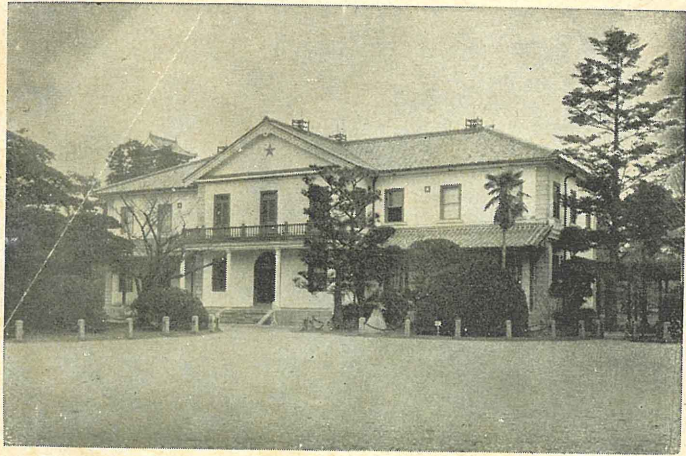


第二十回

昭和十一年

市勢一斑

廣島市



聖蹟大本營址

目次

一、沿革、緒言	一
二、位置及面積	五
三、地勢	六
四、氣象	六
風位	七
降雨	七
氣溫	七
五、戶口	九
○國勢調查	一〇
六、行政組織	一一
七、財政	一三
八、交通	一七
道路	一七

鐵道	六
廣島港	三
通信	六
九、太田川改修計畫	六
一〇、廣島港修築計畫	六
一一、產業	三
農業	三
畜產業	三
水產業	三
工業	三
國內商業	六
外國貿易	六
金融	四
會社及組合	四
產業關係市營事業	四

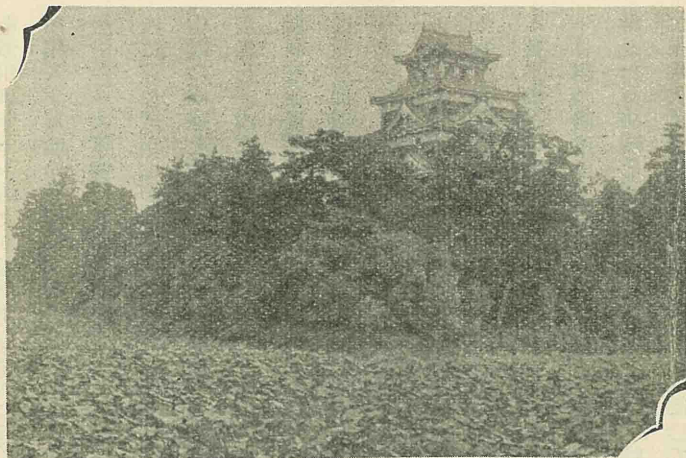
一二、保健	四
衛生	四
水道	五
下水道	五
一三、教育	五
一四、社會事業	五
一五、都市計畫	六
一六、史蹟名務	七
一七、官公衙其他	七
〔附〕市立各廠一覽	七

廣島市勢一斑

一、緒言

今より大凡三百年の昔、太田の河口に横たはれる草毛の寒地が、後年中國に於ける樞要の都市として殷盛を極むるに至ると誰が豫斷し得たりし。人爲なき自然の寂寞の扉に閉されて徒らなる海潮の波打ちに、さては心なき水鳥の宿地として、荒地を晒せる五箇莊の洲も、天正十七年英明閣達なる毛利輝元地勢を卜して此の地に築城の議を起し、夫役を遣はし荒地を開墾して颯爽たる五重の天主閣並に城廓を築き居城を移して近畿八道の貔貅を睥睨し藩政を治むるや藩兵之れに扈從し、居を城下に稱へ其他一般商家町民續々として住家を建つるに及び車馬漸く輻輳し、さしもの荒地も一朝にして昔日の佛を一新し地名も廣島と呼稱、今日の開基をなす。後藩政淺野家に移り治蹟二百五十年間逐年荒地を開墾して宅地を造り或は耕地を築き鋭意町勢の興隆を策せられつゝありしも、維新の變革に會し明治二年六月藩籍奉還のことあるや舊藩主を以て藩知事に任ぜらる。當時本市の行政は市政局幹事に依りて管掌せられしも同年十二月市政局に市尹を置き藩廳に直屬して市全般の事務を總轄するに至つたが、明治四年七月廢藩置縣となるに及び廣島縣第一大區となり區長及び副區長本市の行政を執行せ

り。而して同十一年十一月郡區制を施行せらるゝや本市は廣島區と稱し區長以下吏員を置き縣廳に隸屬して區制を執行し更に明治二十二年四月一日を以て市制を實施廣島市と改稱市役所を中島新町に置き市會、市參事會及び市長其他の諸機關を具へ市政百般の事務を執行することゝなれり。其の後久しき間行政區劃に大した變改はなかりしも第一回を明治七年十月元宇品町、第二回を昭和四年四月市勢の推移を洞察し隣接七箇町村の合併を行ひ、總戸數約七萬八千九百餘戸、三十一萬餘の人口を有する名實共に中國一大都市としての態勢を整ふるに至つた。以上を以て本市の行政組織の過程的大要となくも、更に翻つて本市の財政的過程に及んでは其の間幾多の特筆すべき事項を有せり。即ち行政組織の改革向上に伴ふ市政の狀態は必ずしも此の行政組織の面目と合致せざるものありたり。其の主因とする處は地角の廢合、整理の節度或は擴張の工作等淺野藩治二百五十年間の功績を以つては尙充分となすに足らず、到る處に交通の不便或は海運の振作を災する障害を控へる城下町としての舊態を保つに過ぎなかつた。而も藩政未だ全く其の實質を失はざる維新の初期に於ては昔日築城の要諦となせる要害の觀念は容易に夫等交通の障害を除き自由なる運輸の途を講ずるの意志を持たなかつた。従つて行政の名目により其の名を變更せられたと雖も、此の地勢的整理擴張に對しては闕達なる工作の議を進むるに至らなかつた。郡區制の施行を見たる明治十一年當時も依然舊態保持に戀々たるものありたる折柄、宇内の趨勢は進々として我が帝國海邊の浦々を打診し文化の浪は坐る鎖國の惰眠を貪る固



廣 島 城 天 守

陋の人々に世紀の曉を告げてゐた。當しく維新開港の事ありて以來歐米文化の媒介は、何れも港灣の通運の良否に據る處なれば港灣を有する地方の先覺者は此の文化的潮流を察知し、全力を注いで之れが開港並に港灣築造のことに腐心せる状態にありたり。本市又内海の西端に彎曲し無數の島嶼遠近に散在して四時風浪靜かに船舶の來復に最も宜敷く、通商運輸の上有望なる港灣を控へ、之れが利用に依りては將に本市の市勢發展上多大なる裨益を迎へ得ることハ明かな事實なりしも、因襲生活に執着を持つた區民並に近傍一帶の住民は此の大勢的機運に對し何等積極的工作をなすの勇氣を持たず逡巡徒らに年を過せしも、明治十三年四月千田貞曉氏廣島縣令として本縣に赴任せし際、海路宇品沖に着き更に小舟によりて廣島に上陸せるも、當時區内を流るゝ太田川の

七派川は年々上流より流出する土砂の爲め水深次第に淺くなり干潮時には航路全く杜絶して廣島區内に出入する船の不便尠なからぬものありしを千田縣令は早くも赴任第一日に於て、之等に依る區勢發展上の一大障害たるの缺陷を看破し心中密かに築港のことを決意する處ありて、永年の因襲的不振の帳は茲に仄かながら一道の興隆の萌芽を爲すに至つたが、更に同縣令は赴任直後縣下を巡視し、山陽山陰の兩道を結ぶ幹線道路の必要を認め直ちに立案、二十四萬圓の經費(内國庫補助八萬圓)を以つて着工し、現在廣島市を中心として島根縣に通ずる三筋の脈道を完成、山陰山陽兩道の交通運輸による財政的發展の開基を作り絶大なる貢獻をなし、更に海上運輸に至りては明治十四年八月諸方面の一大反對を押し切つて宇品築港の計畫を樹立し、銳意之れが完成に邁進、數年間に血涙に綴りて漸く現在の方面に一大躍進を齎らし商工業の發達並に學藝の勃興に、有ゆる新機軸をなして逐年興隆の途上を辿り遂に明治廿二年四月市制の實施を見るに至り廣島市と改稱せるものなり。而して夫れより過ぐるごと數年後、時は明治二十七年端しくも東亞の天地に一大戰雲は漲りて日支の交戰、引續き三十七八年日露の戰役に、更に北清、日獨、近くは滿洲、上海事變に至る數次の征戰に皇軍輸送の要衝として赫々たる功績を残すに至れる宇品港は、唯に廣島市の財政的發展の主要價值の上よりのみならず、我が國政上重要な使命を有するものにして國史上永遠に其の事蹟を誇るに足るものあり。廣島市が千

田縣令の慧眼により斯く絶大なる福祉の門扉を開かれて躍進廣島の第一期を完成し、逐次行政諸機關の充實を圖ること四十餘年、其の絶えざる發展の行程は遂に近接七ヶ町村の合併を促進し昭和四年其の實現を見るに至りて茲に躍進廣島の第二期時代の基礎を確立せり。而して此の偉大なる地領の膨脹に伴ひ必然地勢整理の必要を生じ、廣島市會は總動員して百年の大計を議し、太田川河川の一大修築並に宇品築港再計畫は樹立せられ、既に九ヶ年計畫の三分の一は經過、著々其の成果を擧げつゝあり。將に之等諸工事の竣成せる曉に於ては、本市の行政並に財政の各方面に互り一大飛躍を期待し得べく、其の洋々たる先途こそ正しく多幸なる福祉を吾が廣島市民に約束し、更に國政の上に一大貢獻を爲し得るであらうことを斷言するに吝かならず。廣島市勢一斑を著するに當り、其の大梗を記して緒言とし細項は各章に記して廣く公閱を需むる所以なり。

二、位置及面積

東經百三十二度二十五分十六秒乃至二十九分五十六秒、北緯三十四度二十分乃至二十四分二十七秒の間に所在し、東西千二百九十一米、南北八千六百七十九米にして、面積六千九百八十八萬四百二十平方米(四万里五分三厘餘あり)。



廣島測候所

三、地勢

東北西の三方は山脈に圍繞せられ南一帯海に面す。市内は概ね北より南へ緩斜し、河川又南流す。市の北方十六里中國山脈中に其の源を發せる太田川は市の北端に至りて京橋、猿猴、元安、天満、福島、山手、本川の七流となりて廣島灣に注ぐ。市街は平坦なるも東方に比治山、城山、東北方に尾長山、北方に二葉山、西方に茶臼山、鬼ヶ城山、西方に江波山、丸子山、皿山あり。廣島灣頭には宇品島、東に金輪島、南に似島、辨天島あり。地質は砂土にして一般に花崗岩に屬す。

四、氣象

(自昭和六年
至同十年
五ヶ年間觀測平均)

風位

四季を通じ最も多きは北方の風にして次に北々東の風、南西の風、南々西の風等あり。北方の風は秋冬に多く、南西の風は春夏の候に多し。

風位回数表 (五ヶ年間平均)

種別	北	東々北	東北	東北東	東	南東	東南東	東々南	南	西々南	西南	西南西	西	西北西	西北	西々北
計	二、三五〇	一、九六六	二九五	六五	一七一	一〇三	四三	二八四	五九	七六	四七八	三四五	一六二	一七四	三三	
春	五五〇	四三六	六〇	一一	一一	三三	一〇	四四	七三	一五三	二九	一五六	九四	七	四三	
夏	四四五	二七一	四八	二〇	一八	三九	二二	六五	一四四	二六二	三三	一六五	六二	一五	二二	
秋	六五七	六九八	九五	一六	二六	一七	一三	四二	四二	七六	一一七	七八	五	二六	三〇	
冬	六六三	五五九	九〇	一七	一五	一三	八	二二	二六	四六	七二	七九	一三七	八四	九〇	

降雨量及降雨日數

降雨量の最も多きは四月、九月、七月、三月、六月の順なり。

降雨量及降雨日數表 (五ヶ年平均)

種別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
降雨量	七〇・四	五五・一	八二・三	一七三・三	二四四・九	二四〇・〇	二〇一・五	九五・一	一八六・六	一〇六・六	八三・〇	七四・九	一、四七〇・六
降雨日數	八・八	九・六	一三・〇	一四・〇	九・八	一二・〇	一三・二	一〇・二	一三・八	九・四	一〇・〇	一〇・二	一三四・〇

氣 温

四季を通じて氣温の最も高きは八月にして七月、九月、六月、五月、十月の順にして、既往五ヶ年間に於ける平均温度の最も上昇せるは昭和八年にして、次に昭和六年、九年、七年、十年の順なり。

氣 温 表 (五ヶ年間平均温度)

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
昭和六年	四・三	四・七	八・〇	一一・二	一六・八	二二・五	三三・七	二七・三	三三・九	一五・四	一二・四	七・二	一四・七
昭和七年	五・四	三・七	六・五	一一・四	一七・二	二二・五	三六・〇	二七・九	三三・七	一五・五	一〇・九	六・六	一四・五

五、戸 口

都市生活を量の上に表示する代表的ものは人口である。之れを職業別に観るに、其の大半は所謂商工業人口であつて商工業を以て市是とし、之れに依つて大産業都市建設に躍進しつゝある本市趨勢の一斑を窺ひ知ることが出来る。

昭和十年十二月末に於ける公簿上の戸口數は左の通りである。

戸數	八一、六二九戸	前年より	二、七五九戸増加
人口	三二七、四七二人	前年より	一三、五二七人増加
	内	男	一六五、〇二〇人
		女	一六二、四五二人

尙市制執行以來に於ける世帯及び人口の累年比較を表示すれば左の通りである。(五ヶ年毎に示す)

年次	種別	戸數	人口		摘	要
			男	女		
明治二十二年		三、八二四	四、三九〇	四、一九七	八三、三七七	〔戸數、人口ノ増加シタルハ元宇品町(宇品島)ヲ合併シタルニ由ル
同 二十七年		二五、八六六	四八、四四〇	四三、四三一	八六、八七一	
同 三十二年		三一、一四五	五五、三二八	五五、五五三	一一〇、七〇六	〔戸數、人口ノ増加シタルハ寄留ノ整理ヲナシタルニ由ル
同 三十七年		四〇、八〇八	七〇、三九九	六五、六二六	一三六、〇二二	
同 四十二年		四二、四七六	七二、三二九	六八、八五一	一四一、〇〇〇	〔戸數、人口ノ増加シタルハ隣接七箇町村ヲ合併シタルニ由ル
大正三年		四七、三九〇	八四、五六六	七八、四六九	一六三、〇三三	
同 八年		三九、五三四	七七、〇六六	七八、三八二	一五五、四二八	〔戸數、人口ノ増加シタルハ寄留ノ整理ヲナシタルニ由ル
同 十三年		四三、三九九	八九、三三三	八七、八八八	一七七、三三〇	
昭和四年		六六、八〇〇	一七〇、三三〇	一三五、九四八	二七三、三三六	〔戸數、人口ノ増加シタルハ隣接七箇町村ヲ合併シタルニ由ル
同 九年		七六、八七〇	一五八、一九五	一五五、七五〇	三三三、九四五	

而して之れを職業別に觀れば次の通りである。

年次	職業分類										計
	農業	水産業	鑛業	工業	商業	交通業	公務	其他	無職業	計	
昭和四年	一九、六五五	八、六九二	三九二	五四、一七五	六二、六〇一	一六、〇七九	三〇、二二七	三三八六	四七、五八一	二七三、三三八	
同 五年	一六、三三六	三、六〇〇	五二六	七二、八五六	七五、四六一	二〇、七四五	三四、八五九	一五一三三	三六、五二九	二七三、〇九五	
同 六年	一六、七七一	四、二三三	七二六	七七、三四八	八二、〇七五	二三、七四三	二八、五二五	一八〇六五	三七、五三三	二八八、九七八	

同 七年	一五、九七一	五、三二二	七七五	七八、一九三	八一、九三九	二四、五六六	二九、七三三	一八、八五三	三八、八八〇	二九四、〇〇〇
同 八年	一七、三六二	六、五三三	七七七	七九、五四〇	八三、五五五	二六、〇〇六	三二、〇九四	二〇、一九五	四〇、〇六三	三〇五、六六五
同 九年	一五、〇〇四	五、六六六	五二二	六六、二二三	七〇、二七八	二二、四四七	二六、五九〇	一九、六三三	八七、七八三	三三三、九四五
同 十年	一六、四九八	六、六三九	五六六	六五、七三八	七三、二一〇	三三、六四七	二八、一七七	二〇、三八八	九三、六九九	三三七、四七三

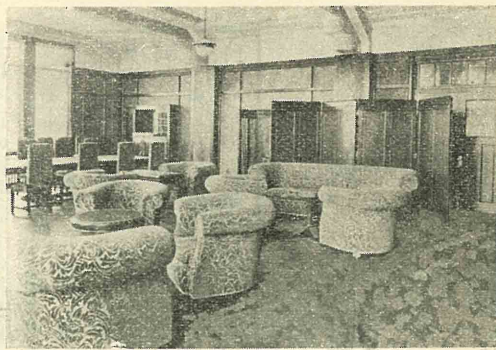
次に本市の國勢調査の結果は左の通りである。

年 度	世 帯 數	人 口		計
		男	女	
大正九年	三四、五五三	八三、三三七	七七、一六七	一六〇、五〇四
同 十四年	四二、八六六	一〇一、九六六	九三、七六五	一九五、七三一
昭和五年	五八、九九二	一三九、一六五	一三一、二〇〇	二七〇、三六五
同 十年	六六、三三六	一五八、二四一	一五一、八七七	三一〇、一一八

六、市の行政組織

一、執行機關

市政事務の圓滑なる運行發展に重要なる關係を及すを以て之が圓滿なる運用を期する爲め其の組織



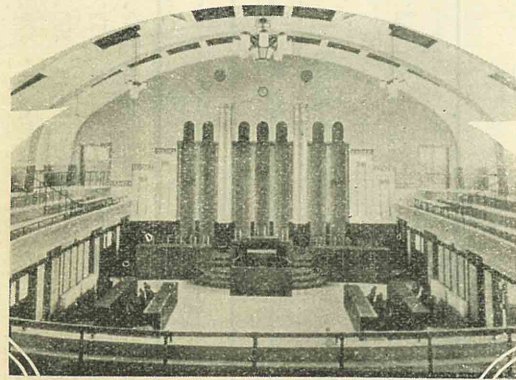
市長室

編成は従来幾多の變更改善を加へ來つたのであるが時勢の推移と事務の實質系統等に鑑み現在に於て市長、助役(二)収入役の下に六部二十課を置き五十六係を配し各事務の統一と能率の増進を圖つて居る。

而して之に従事する吏員の定員は四百二十九人なり、今其の系統の概要を示せば次の通である。

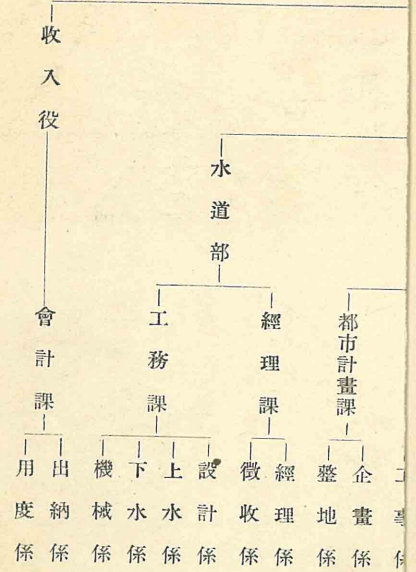
二、議決機關

本市現在の市會議員定數は四十四人である



市會議事堂

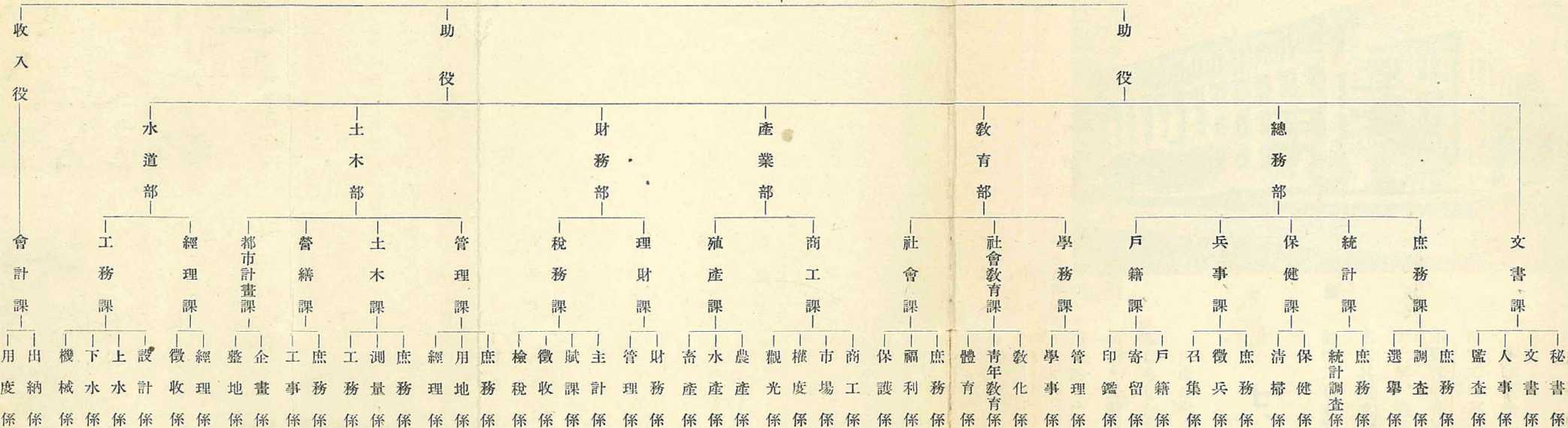
昭和八年五月條例の改正を行ひ東部選舉區より二十一人、西部選舉區より二十三人選舉することとなつてゐる。
 名譽職市參事會は其の定數を十人と定められ市會議員中より選出せられて居る。



備考
 雇傭人ハ月給者ノミヲ表
 示セリ

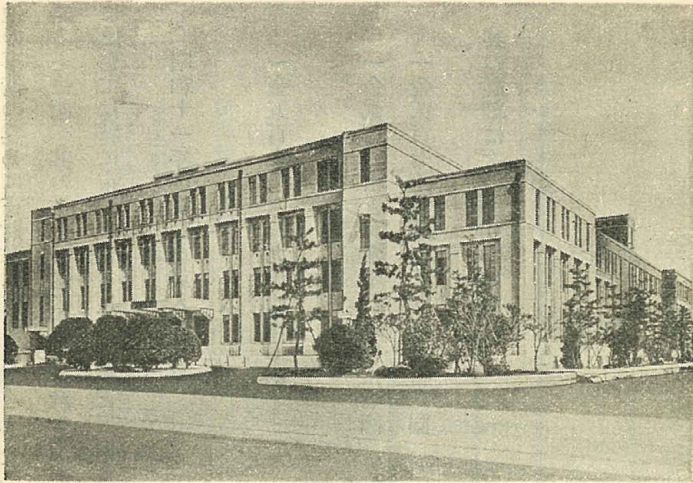
廣島市行政組織

市長



備考 示セリ 雇傭人ハ月給者ノミヲ表	合計 七四一	手機補關	技手補	書記補	巡衛視生	監衛督生	調劑員	獸醫	技產手業	機關手	技手	書記	市醫	技師	視學	主事	部長	收入役	助役	市長
		一	一五	三五	二五	二	二	二	一	七	四九	二〇八	一二	九	三	一四	三	一	二	一
		出圖納手書	關丁	看守	電交換手話	運轉手	機關工	電氣工	給仕	使丁	守衛	看護婦	看護婦長	巡視員	工手	助手	保姆	教師	雇	囑託
		三	三	八	四	三八	二	二	三五	八六	七	一六	二	一	八	四〇	二五	二	五五	四

職員 (昭和十一年九月五日現在)



市 廳 舎

市 廳 舎

本市廳舎の構造は耐震耐火鐵筋コンクリート造にして外部は（リシン）塗仕上げとし其の腰部は本縣産の花崗石張にして屋上議場の部分を「アーチ」形、裝飾は和蘭式とし室數百十一室、暖房、給水場其他文化の要式を備へ敷地面積二千九百三坪餘總工事費實に七十四萬九千二百二十八圓なり。

七、財 政

自治の發達は必然的に都市の施設經營を多岐多端ならしむると共に一方委任行政の増嵩と物價の昂騰とは財政の急激なる膨脹を來すのである、本市に於ては昭和四年四月隣接七ヶ町村の合併と其

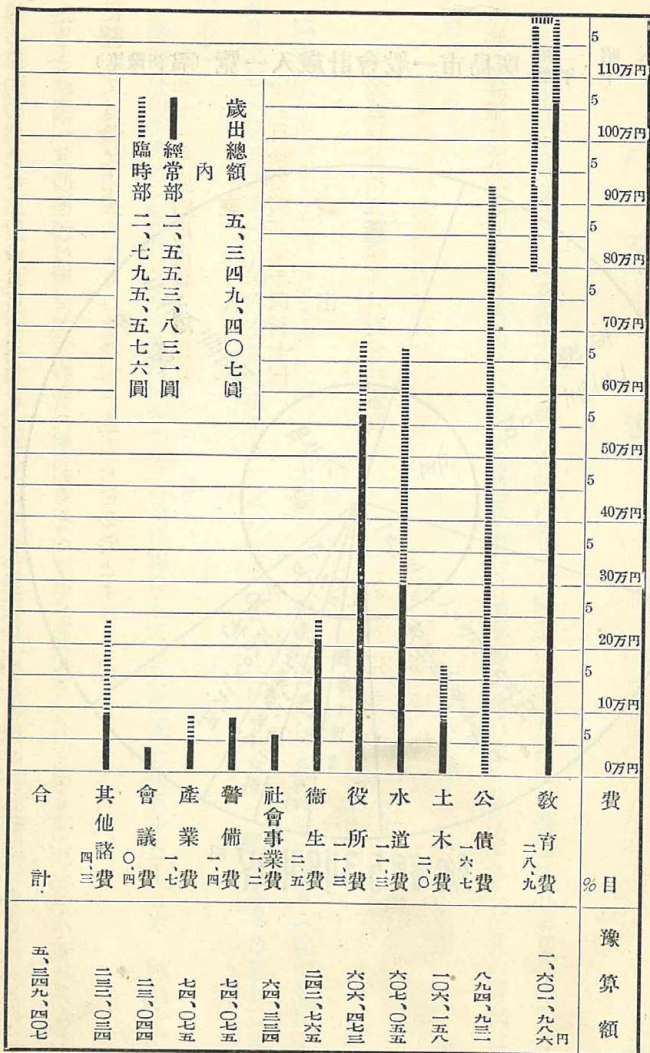
他の事情の爲めに市財政は益々増加を來して居るのである。而して財政の膨脹は一面自治の發達を物語るるとは謂へ其の推移は遂に都市財政の行詰りを生ずる結果に外ならざるかの惧があり従つて市財政に關しては特に市民のより良き理解と協力とを必要とするものである。

昭和十一年度廣島市歳入出豫算

歳入	歳入豫算高
一金五百參拾四萬九千四百七圓	
歳出	經常部豫算高
一金貳百五拾五萬參千八百參拾壹圓	
	臨時部豫算高
一金貳百七拾九萬五千五百七拾六圓	

其の詳細は次の通りである。

昭和十一年度 廣島市一般會計歳出一覽 (當初豫算)



千七百二十四米となつてゐる。

而して本市中央元標より主要都市に至る國道料程は次の通りである。

豊原町	二六二七、五六籽
札幌市	二〇〇七、五四籽
仙臺市	一二八三、四五籽
東京市	九一八、九四籽
新潟市	九八三、八六籽
横濱市	八九五、六七籽
名古屋市	五四九、〇〇籽
京都市	四〇三、七四籽
熊本市	三八八、〇六籽

鐵道

大阪市	三五四、六八籽
松江市	一九一、三六籽
岡山市	一七四、〇一籽
福山市	一〇七、六八籽
尾道市	八七、四九籽
吳市	二七、二七籽
山口市	一三九、三二籽
長崎市	四三九、六七籽
鹿兒島市	六〇九、五九籽

本市を通過若は起終驛とする鐵道は現在既設線六線とそれに接続して陰陽の連絡線となるべき未成線二、三線あり。

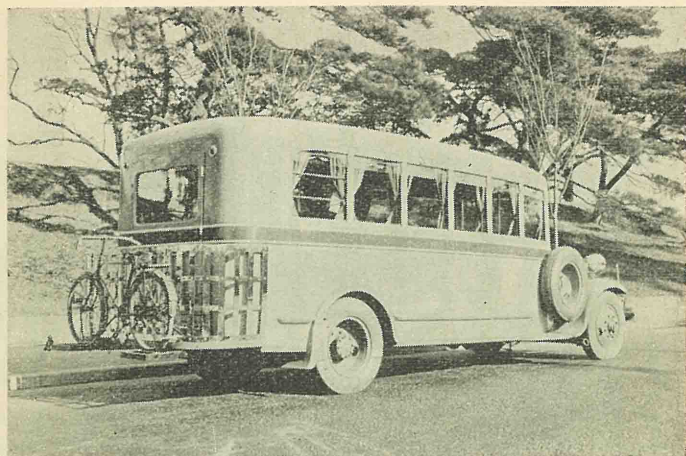


廣島驛

尙鐵道局に於ては輒近著しく増加した既設線の延長に伴ひ、監督行政上諸種の不便を除き以て運輸能率の増進を圖る爲め、本年度に於て地方鐵道局一局の新設を決定せられ之が設置地を本市とせられたのである。

即ち本市が後記諸線の集中地點であるのと、中國四國の中央大市場であり、且第五師團、陸軍運輸部所在地であり加ふるに吳軍港に近く、同じく交通部監督官廳たる廣島遞信局の所在地である等經濟上軍事上將又行政上最適地であるとの見地より本市に決定せられたものである。

山陽本線は市の北邊を東西に走り市内に廣島、横川、己斐の三驛がある其の一ヶ年(昭和十年度)の乗車人員四百四十八萬五千六百三十三人、降車人員四百七十一萬二千四百九十三人にして貨物は發送十四



廣島濱田港間省營バス

二〇
萬二千八百四十二噸、到着は二十五萬七千二十七噸となつてゐる。

吳線は廣島驛より海田市驛に至り分岐して廣島、吳兩軍都を結ぶ線にして延長二十六六四、昭和十年十一月三吳線の全通と共に山陽線三原驛より六十七軒海の公園瀬戸内海を走り沿岸部と本市との交通は一層至便となつた。

國鐵廣濱線は電氣鐵道にして省線横川驛附近を起點として安佐郡可部町に達する線にして延長十三六八、縣下北西部との連絡線であり將來廣島本郷線（廣島縣可部町―島根縣濱田町間）が完成すれば三神線と共に陰陽連絡線となるものである。昭和十一年九月一日國鐵に移管され益々健實なる歩を續けつゝあり。

省營廣濱バスは昭和九年九月開通し廣島驛を起點

とし横川町より縣道を北上して山縣郡大朝町及赤名峠を経て島根縣濱田港に至る延長百二十十軒を往復して居るのである。定員三千八名の豪華自動車に沿線を睥睨しつゝ、走る狀は實に堂々たるものである。而して昭和十年度中私設廣濱鐵道株式會社時代の乗客人員百二十五萬八千十四人にして貨物取扱は十軒九七六なり。

私設鐵道藝備線は其の線名の示す如く本市と備後三次、十日市、庄原方面を連絡する線にして延長六十八軒七であつて本年十月十日三神線の完成に依り中國山脈を横斷する待望の列車として文化に惠まれざる中國山岳地方にも交通文化の黎明が訪れるはずで重要使命を持つ線となつたものである。

而して昭和十年中の乗降容六十五萬四千二百十八人にして貨物量は十二萬千八百三十九噸である。私設宮島線は電氣鐵道にして省線己斐驛を起點として省線宮島驛前に達し連絡船に依り日本三景の一たる嚴島に到る線であつて延長十六軒一である。

而して昭和十年度中の乗車人員三百五萬九千四百十一人、乗車賃金三十萬四千五百十一圓三十八錢となつてゐる。

市内電車軌道は本市を東西南北に走り延長十六軒〇二二にして其の線名等次の通りである。

本線 自廣島驛前至己斐驛前 五軒一一七
西塔線 自紙屋町至御幸松 二軒三九三

宇品線 自御幸橋至宇品 五籽九〇〇
 白島線 自八丁堀至白島 一籽一五二
 横川線 自左官町至横川驛前 一籽四六〇

而して昭和十年中の乗車人員二千三百萬三千三十九人、賃金百六萬九千九十二圓十錢となつてゐる。市内バスは廣島乗合自動車株式會社の經營にして市内の東西南北を八線に分ち運轉して居る、昭和十年度中の運轉籽數二百四十五萬四千四百四十四籽にして乗降客三百三十三萬千五百八十七人、賃金十二萬九千七百七十圓三十一錢なり。

廣島港

廣島港は内外通商港として優秀の地位を占めるものであるが軍事上の重要港である關係上開港々則の適用を受けるに至らないので本市の輸出入は殆んど阪神若は關門地方を經由するの已むを得ない状態にあつたが大正九年十月本市に保税地域の設定を特許せられ神戸税關出張所を置き我國に船籍を有する外國貿易船舶の出入を特許せられるに至り其の輸出入貨物は次第に増加し殊に這般の滿洲事變に引續き滿洲新國家の建設に依り同方面に對する輸出貿易の増進は眞に目覺ましいものがある。

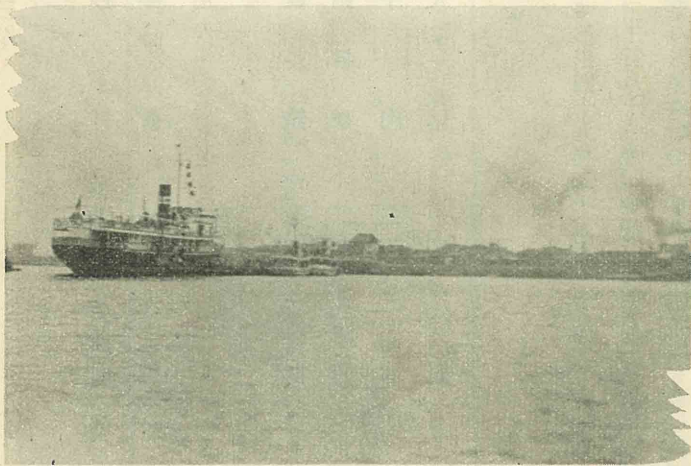
輸出入

昭和十年中の輸出額二百八十七萬六千三百七十四圓にて前年に比し四十三萬六千六百四十一圓、昭和元年に比すれば實に七百六十四倍の増加を示せり、輸入額は昭和十年度は五百五十二萬二千四百五十九圓にして前年より二十一萬六千四百九十圓昭和元年に比し九十七萬七千九百七十六圓各増加せり。輸出額に於て著しき増加率を示せるは蓋し本市生産工業の飛躍を證するに足るものと云ふべし、今其の輸出入を國別、品種別に觀るに

輸 出

關東州 一、八五七、〇一五圓 總高ノ六五%
 滿洲國 七、八四、九二〇圓 總高ノ二七%

輸 入



廣島港 (陸軍運輸檢閱濟)

滿洲國 四、五五九、二七九圓 總高ノ八三%

品種	別 (輸出主要品)	品種	別 (輸入主要品)
雜品	四一六、二八二圓	杉材	三七三、九七〇圓
清酒	三〇九、二〇一圓	壘表	一四〇、九〇七圓
縫針	一〇四、四〇八圓		
石炭	二、〇六二、〇七四圓	銑鐵	一、七〇二、一九八圓
綿羊皮及山羊皮	二七〇、七二五圓	飼料	二六一、九四三圓
大豆	二二二、五四九圓	牛肉	二一三、三一四圓
混合飼料	二二三、二五二圓	大豆	一一六、三〇〇圓

移出 入貨物

國內貨物の移動は近年頗る増加し來り昭和九年に於て移出四十九萬二千五百二十八噸、金額五千六百七十二萬八千八百八十九圓にして、移入は百三十六萬三千八百八十五噸、金額一萬百八十八萬九千九百七十五圓に達したる所、同年九月に於ける阪神地方大風災の影響は昭和十年中の海運界にも著しき變動

を起し、同年中の移出高七十一萬八百二十五噸、金額五千六百十四萬九千四百八十六圓、移入高五千六百十四萬九千四百八十六圓、移入高百十四萬四千四百七十四噸、金額七千九百九十八萬四千四百五十一圓となれり。

公用、共用棧橋使用狀況 (昭和十年度)

種別	棧橋	市營棧橋	共用棧橋	合計
繫船數	九、六六九	二四、九三一	三四、六〇〇	
同總噸數	二、〇二四、二九〇	四八二、八九五	二、五〇七、一八五	
乘客人員	二〇四、〇一四	二五二、七一三	四五六、七二七	
降客人員	一六一、七一八	二五七、五三二	四一九、二五〇	
積貨噸數	二〇、一一五	八、三六九	二八、四八四	
降貨噸數	九、九六二	七、三七七	一七、三三九	

以上港勢の一般を觀ても躍進途上の吾が廣島市は、一は太田川の改修を見、一は廣島港築港改修工事竣工の曉全く吾が三十二萬市民の幸運を偲ぶと共に益々健實なる歩を續けつゝあり。

通信

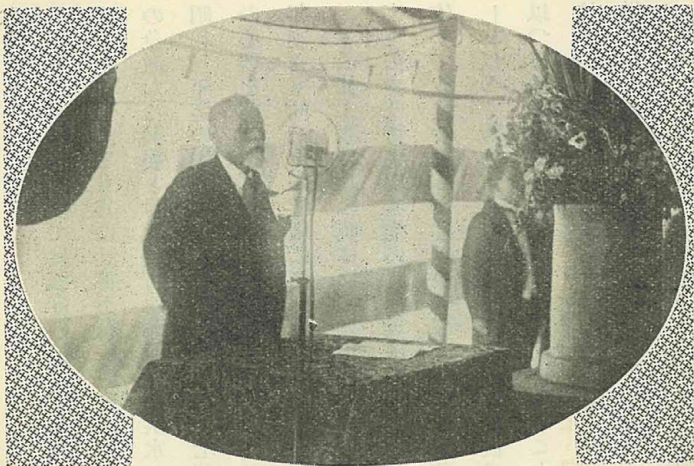
市内に於ける郵便局は四十九局を數へ其の内譯及び郵便取扱數は次の通りである。

一等局	一等局
二等局	三等局
三等局	四十五局
引受通常郵便物	三百八十八萬七千九百四十三通（普通を除く）
配達通常郵便物	六十八萬八千七百三十通（普通を除く）
引受小包郵便物	七十五萬四千七百二十三箇
配達小包郵便物	五十萬四千六百六十八箇

尙市内に於て電信取扱局所は十六局あり、電話取扱局は十四ヶ所である。

九、太田川改修計畫

太田川は廣島縣安藝國の略中央部に貫流する中國有數の河川にして源を本縣の西隅山口、島根兩縣



（昭和11年7月4日）市長の挨拶會場工事起修築太田川港廣島

の境を劃する中國山脈に發し柴木、瀧山等の支川を合せて山間を東南に流れ、可部町附近にて三篠川を容し安藝の平坦部を過ぎ廣島市に入るや七派川に分流して廣島灣に注ぐ、可部町以上は山地部に屬すと雖も四十籽の上流加計町附近迄は舟筏を通し得べく下流部に展開する沃野約九十平方籽は縣内二大平野の一にして其の大部分は本川の恩恵を受け流末に位置する廣島市は人口三十二萬餘を有し、諸官衙、高等諸學校、陸軍諸機關を備へ海に廣島港、陸に諸鐵道集中し實に中國第一の重要都市なり。

尙太田川の七派川に分れて廣島市内に貫流するを以て常に交通を資くるのみならず、給排水に將又産業に市の發展を左右すべき主要なる動脈を形成し、特に昭和八年以來著工せる廣島港とは密接不離の關係を有し、將來廣島市及附近の發展を左右するもの

なり。

然るに本流域に於ては強度の豪雨屢襲來して洪水を惹起し、水害を蒙る事多く従つて往時より治水に力を盡したるも其の計畫不統一規模又狭小にして未だ大水を防止するに足らず。加ふるに廣島市街の急激なる發展と附近農村の開發とは洪水の疏通を妨げ、水位を高むるの素因を成し、大正八年以來昭和三年迄の水害損失は實に約壹千百拾七萬圓に達し沿岸民は本川の改修を熱望する事多年政府又其の心を認め遂に昭和七年度より改修工事に著手するに至れり、其の總工費實に壹千五百萬圓昭和七年度より同二十一年度に至る十五ヶ年度の繼續事業として國に於て直轄施行することゝなれり。

本改修工事竣功の曉には廣島市及其の附近に於て耕地二千六百ヘクタールの洪水氾濫を除去し災害復舊費及耕地其他の諸損耗に基く甚大なる水害損失を免るゝは固より高水は殆ど山手川分水路に依りて放流せらるゝを以つて茲に初めて廣島港修築計畫は樹立せられ、昭和八年度以降工事施行中に以つて治川土地の商工業發展を促進すること著大なり。又廣島市都市計畫事業を容易ならしめ橋梁其他各種土木施設の經費を節約し得ること甚大なるべし、尙交通機關の安全排水状態の改良沿岸住民を利すること多く改修の効果莫大なりと云ふべし。

特に太田川改修工事竣成と共に舊派川の整理を施行せんか、廣島港出入の貨物は各派川に依り常時

市内各所に搬出入せられ、以つて水都廣島の運輸交通及産業の發展を期して待つべく斯く觀すれば太田川改修工事の大廣島市建設の基を開くと言ふも敢て過言にあらざるべし。

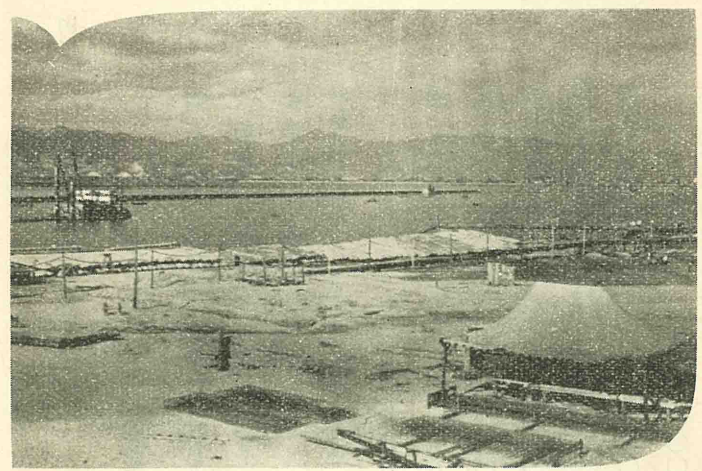
工事計畫豫定

- 一、起工年月日 昭和七年七月十六日
- 二、竣功豫定年度 昭和二十一年度
- 三、各年度別經費

年度	經費	年度	經費
昭和七年度	四六、五三二圓	昭和八年度	七五、一九二圓
同 九年度	二五一、五八六圓	同 十年度	二五二、五二五圓
同 十一年度	七七五、一七五圓	同 十二年度	七〇〇、〇〇〇圓
同 十三年度	七〇〇、〇〇〇圓	同 十四年度	七〇〇、〇〇〇圓
同 十五年度	七〇〇、〇〇〇圓	同 十六年度	九四〇、〇〇〇圓
同 十七年度	二、〇〇〇、〇〇〇圓	同 十八年度	二、四四九、〇〇〇圓
同 十九年度	二、五〇〇、〇〇〇圓	同 二十年度	二、〇〇〇、〇〇〇圓
同二十一年度	九一〇、〇〇〇圓		

一〇、廣島港修築計畫

廣島港は瀬戸内海中廣島灣の中央に位し、前面には大小幾多の派川の水運と相俟て、古來又江津として殷盛を極めたるも比年太田川の排出土砂は河口、港域を埋積して陸地を漸次擴張し、一面産業の助長發展上に効益を齎せること尠からずと雖他方船舶の繫留に支障を加へ、且逐年増大する大型船の出入に困難を感じるに至りしを以つて茲に明治二十年頃時の千田知事は前後數年に亙り萬難を排し、宇品築港の大工事を完成せしめ通路、棧橋、物揚等の諸設備を施して港灣利用上に一新紀元を劃し、陸軍に於ては此の所に運輸部を設置して日清・日露の兩戰役に軍事港として重要な使命を發揮せり。



（廣島港運輸部開港） 廣島港の上途完成

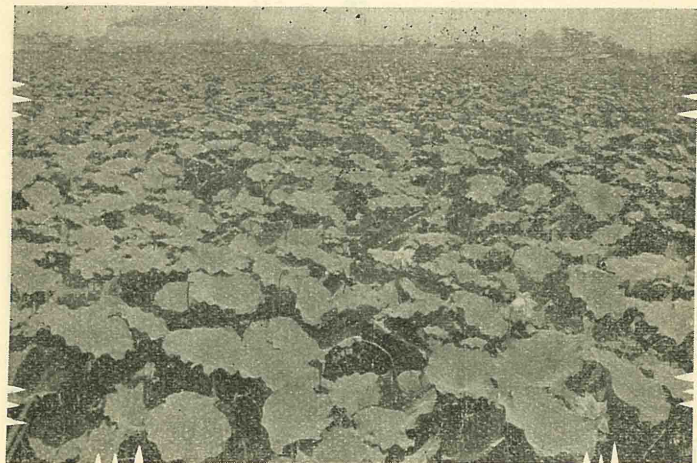
爾來本港の附近、島嶼間の交通運輸は固より沿海各航路船舶の寄港する有り、又遠く大連、青島、臺灣、南北鮮航路の樞要港として大船巨舶の繫留荷役の激増等状態にあり、後方地域としては廣島縣下の大部分及山口縣、島根縣の一部に亙り物資豊にして陸上交通機關克く備はり山陽道の要衝に當れり。

從來の廣島港（宇品港）は西は宇品島を限り其の東方一帯の地域にして、南に金輪島在り港内水面積百餘萬坪に及ぶも從來商工たるよりも寧ろ軍事港として發展し其の樞要なる臨港地帯の多くは陸軍の施設に占有せられ大廣島市商工業の進運に順應する港灣施設を企畫するの餘地なきを以つて之に西隣し宇品町の兩方京橋川の川口に新に之が港灣施設をなさんとす。

工 事 豫 定

- 一、起工年月日 昭和八年六月十四日
- 二、竣功豫定年度 昭和十六年度
- 三、各年度別經費

昭和八年度	二九九、八〇九圓	昭和九年度	六一七、二七七圓
同 十年度	四四三、八三二圓	同 十一年度	三三九、〇八三圓
同 十二年度	三〇〇、〇〇〇圓	同 十三年度	三〇〇、〇〇〇圓



運 根 畑

昭和十四年度	三〇〇、〇〇〇圓
昭和十五年度	三〇〇、〇〇〇圓
同 十六年度	六〇〇、〇〇〇圓

一、 産 業

農 業

本市商工業の發展と區劃整理の進展に伴ひ耕地は漸次宅地、工場敷地、通路等に變更されて其の面積を減少せられて居るのである。

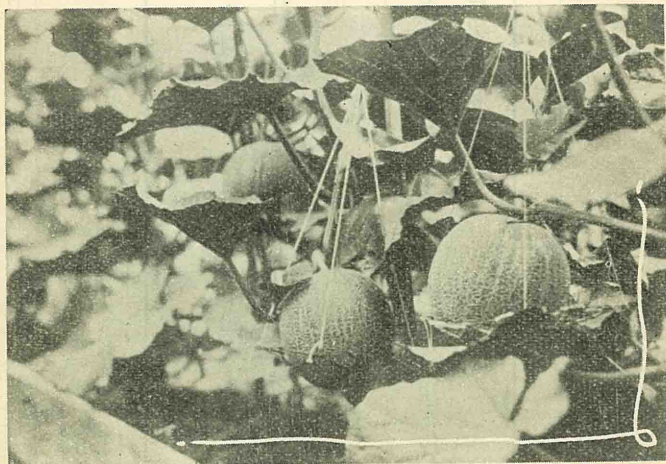
而して耕地の減少に伴ひ農作者は時代に適合した集約的農業經營の組織に變更するの氣運を醸成し居るのである。

尙昭和十年中の農産額は次の通りである。

農 産 額 五百二十五萬七千三百圓



荷 葡 畑



メ ロ ン

種別	收穫	種高	作付反別	價格
米	八、三〇二石	三、八九七段	二五九、八二二圓	
麥	一三、五〇二石	六、二九七段	一五七、二〇七圓	

蔬菜花卉 二百七十七萬圓
 果實 四十一萬圓
 其他 百四萬二千二百圓

畜産業

雜穀 八十二萬圓
 速成園藝 二十二萬六千圓
 計 五百二十五萬七千二百圓

本市の畜産殊に牧畜に關しては夙に之が獎勵をし著々其の發展を促したものであるが、現在に於ては多數の家畜業者及搾乳業者があり昭和十年中の成績は次の通りである。

種目	生産	現在數	種目	生産	現在數
牛	一四二頭	六七四頭	山羊	三八頭	六五頭
豚	三一七頭	六六三頭	鷄	八〇、三五〇羽	二一三、〇九五羽
馬	十	七四三頭	鷺	二、〇二〇羽	五、三四五羽

搾乳高 四千三百十七石
 價格 十七萬二千六百八十圓
 而して一ヶ年昭和十年中の畜産總額百一萬五千
 百八十三圓である。

水産業

本市の近海は概ね温流であるから魚類の棲息、貝類の繁殖に適し、殊に海苔、牡蠣の養殖に最好の適地にして名聲赫々たり。

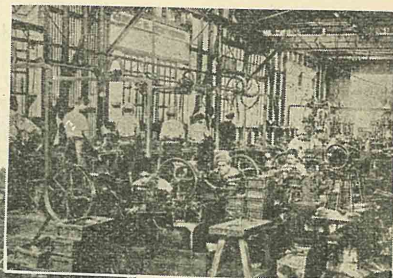
而して昭和十年中の水産額は次の通りである。
 漁獲物 五十三萬四千七百九十八圓
 養殖物 七十八萬四千九百九十二圓

工業

本市は産業的環境に恵まれ、而して住民の工藝的



牡蠣養殖場



製針工場



縫詰工場

能力に依り、藩政時代より既に産業都市として發達し來つたのであるが、眞の産業都市として發展したのは日清戰役以降の事である。所謂軍用港として大いに其の使命を完ふしたる廣島港は明治二十二年に完成し同二十七年山陽線の開通を見るに至り、日清・日露兩戰役の影響を蒙け軍事、商工兩方に活躍したものである。而して同時に企業熱の勃興を見、罐詰、製綿、綿糸紡績、板紙、洋紙、指物及燐寸製造業等の生産工業と印刷、電気、瓦斯、鐵道、軌道及金融業の創業を見るに至り後歐洲大戰の勃發となり世界的物資需給の變調を來し本市の縫針、燐寸等盛に海外に新販路を開拓し、尙大戰以來人造絹糸、護謨製品、船底塗料、人造砥石、コルク製品、金ペン、機械工具類、兵器、自動自轉車及染織等の新興業も踵を接して起つたのである。斯くの如く新興業の勃起を見るに至れる所以のもの

は本市が比較的企業諸條件に恵まれて居る事に起因するのであつて即ち豊富低廉なる電力及上水道あり、加ふるに質實勤勉なる労働者あり、天候にめぐまれ企業の好適地たる諸條件に適合せる所以なり。昭和十年中の工産額は次の通りである。

工産總額	八千四百三十四萬三千二百一十一圓
金屬工業	千五百八十五萬四十一圓
化學工業	七百七十二萬二千四百十六圓
纖維工業	二千六十九萬七千八百四十八圓
飲食料品工業	八百九十五萬二千三百四十八圓
木製品工業	九百七十萬三百七十三圓
印刷及製本工業	四百六十二萬五千八百七十六圓
紙製造工業	百六十七萬四千六百八十五圓
花菱及藥製品工業	五十六萬九千六百三十五圓
其他	四百五十四萬九千九百八十九圓
工産品中主要なるものは次の如し。(單位千圓)	

品名	價額	品名	價額	品名	價額
印刷類	四、六七五	罐詰	三、二二〇	絹及絹綿交織物	三、四三八
人造絹糸	五、四九二	製綿	二、二六五	綿織物類	二八六
防腐木材	二、五二〇	綿糸紡績	四、五九〇	護謄製品	二、六〇〇
指物	三、一六三	酒類	七四〇	製材	一、二九七
針	一、一七八	蚊張地	一九三	菓子類	一、三一二
蒲鉾類	八七六	疊	五〇二	紙製品	一、七一
賣藥	一、二〇一	金屬製品	一五、五八一	蠶附油	二六〇
石炭瓦斯	六一五	板紙	六三九	石材製品	三〇二
晒及染物	一、二七七	足袋	四五八	醬油	一九一
履物	一〇二	傘	四五一	製造昆布	二一四
清涼飲料水	五六八	靴	三九六	人造砥石	六八五
塗料	七一八	麻及麻交織物	二八九	金	二六八

國內商業

本市の國內商業の商勢圏は、所謂廣島港の後方地域たる本縣下の大部分及沿海部、藝南島嶼部と、島根縣下石見國及山口縣下周防國の各大半を始めとして、西は北九州一圓より東は阪神地方一帯に及び、更に本市特産品縫針、罐詰、製綿、清酒、捺染、鑄物、機械工具、人造絹糸、船底塗料、ゴム製品、和洋家具、佛壇（生地及仕上）コルク製品、自動自轉車等の如きは、遠く臺灣、朝鮮、北海道等全國各地にその取引を伸張して居る。殊に大正九年神戸税關廣島出張所の設置、昭和五年臺灣糖内地移入場設置と共に、海陸運輸、特に自動車運輸交通の發達と共に、頗る飛躍的發展しつつある現状である。

移出入品中主要なるものは、木材、石炭、野菜、防腐電柱、石材、セメント、米、飼料、和洋紙、空罐、煙草、鮮魚、鉄力、重油、揮發油、瓦、食鹽、クレオソート油、分蜜糖、菓子、燕麥、苛性曹達、鐵類、肥料、煉瓦、コルク及同製品、罐詰、綿織物、タンス、果實類、製綿、牛馬油脂、蠟、ゴム製品、藥品、染料塗料、薪炭、綿糸、味噌、醬油等で、その取引價額は、一億七千六百萬圓を超えてゐる。

外國貿易

廣島港が、港津としての地理的地位は頗る優秀なものではあるが、軍事上の要衝たる關係上、開港

港則の適用を受くるに至らないので、本市よりの輸出入は殆ど阪神若くは關門地方を經由するの已むなき状態にあつた。が大正九年十月、宇品町に保税地域の設定を特許せられ、神戸税關出張所を置き、内國船にして外國貿易に従事する船舶の出入を許可せらるゝに至り、輸出入貨物は漸次増加の途を辿り、彼の滿洲事變に續いて滿洲國の建設に至るや、同方面に對する貿易の増進は眞に目覺しいものがある。

主要な取引先きは、大連及び大連朝鮮を經由する滿洲國各地、天津、青島、上海、漢口等支那の主要港並びに佛領印度支那、フィリッピン、布哇、北米、浦鹽等である。

輸出品中の主なものは、植物及動物、蔬菜、漬物、蜜柑、煎魚、海苔、罐詰食料品、酒類、藥品類、塗料、打綿、麻織物、漁網、運動靴、履物類、紙類、礦物製品、鐵及同製品、縫針、唧筒、燐寸用經木、挽材、丸太材、疊表、木製品、ゴム製品等で、その額二百八十七萬六千圓を超えてゐる。

輸入では、大豆、小豆、高粱、落花生、荏胡麻子、亞麻子、牛肉、緬羊皮山羊皮其他皮も角牙甲殼類、藥品類、石炭、銑鐵、耐火煉瓦、木材類及木製品、飼料類、麩、豆糟等で、總額五百五十二萬二千圓餘、輸出入合計では八百四十萬圓に達せんとしてゐる。

然し以上は、所謂、廣島に於ける通關貨物に過ぎない。この外に、前述の如く不開港である事や、航路の關係等で、實質的には外國との取引貨物でも、阪神關門の貿易業者を仲介として出入する貨物

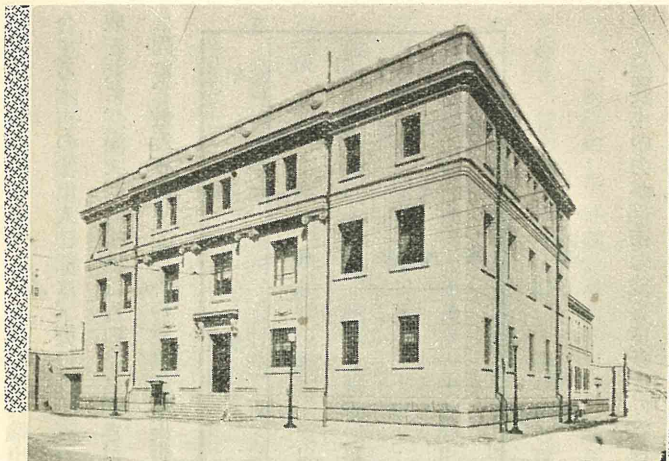
が、現在でも頗る多額に昇り、概算、輸出約五百萬圓、輸入約千二百萬圓以上になつてゐる。之等を含む本市の輸出入總額は、實に二千五百萬圓と稱せられてゐる。之等も目下修築中の大廣島港の竣成と共に、漸次、直接輸出入の途を開き、將來の大躍進が期待せられてゐるのである。

因に、最近五ヶ年間、神戸税關廣島出張所通關の貿易額は左の通りである。

年次	輸 出 額	輸 入 額
昭和六年	三三二、八四七 ^円	三、一五一、四七二 ^円
昭和七年	六〇五、八七七	二、七九八、七三〇
昭和八年	一、六五七、〇五六	四、三五八、〇二一
昭和九年	二、四三九、七三三	五、三〇五、五六七
昭和十年	二、八七六、三七四	五、五二二、四五九

金 融

金融資本の力が都市の成育に多大の寄與する事は今更言を俟たない所であるが、本市の金融状態を檢するに即ち市内に本店を有する銀行は農工銀行一普通銀行一貯蓄銀行一合計三行で其の他日本銀行



日 本 銀 行 廣 島 支 店

を始め、他都市に本店を有するそれ等の支店数は十二行で昭和十年度中に取扱はれたる預金高は百五十二萬二千九百七十三圓にして同年中の貸付高は七十三萬五千六百五十四圓なり、尙手形交換高は二億六千四百七十五萬八千五百八十七圓である。
逓信省に於て昭和十年十二月本市に貯金支局を設置され地方金融の一助に資せんとしてゐる。昭和十年度中の郵便貯金總額は預入高千五百四十三萬二千四百九十二圓拂戻高一億四千九百九十九萬四千六百十四圓年末現在高二千三十八萬四千六百七圓にして而して本年新規預金人員は四萬五千七百二十二人にて本市民にして預入總人員實に二千三十八萬四千六百七圓となつてゐる。

會社及組合

本市に於ける昭和十年末現在の會社及各種組合數は次の通りである。

會社

- 株式會社 百九十九社
- 合名會社 百二十四社
- 合資會社 四百十七社

以上の各會社の資本總額は一億九千八百八十四萬千二百二圓にして之を業種別に觀れば

- 商業會社 四百九十一社
- 工業會社 百七十八社
- 交通運輸會社 二十九社
- 金融會社 十七社
- 雜會社 三十社

組合

- 産業組合 二十五組
- 同業組合 十一組合
- 準則組合 八組
- 任意組合 百二十組合
- 工業組合 十一組合
- 商業組合 十組合
- 酒造組合 一組合
- 畜産組合 二組合
- 蠶種組合 四組合
- 水産組合 二組合
- 漁業組合 十二組合

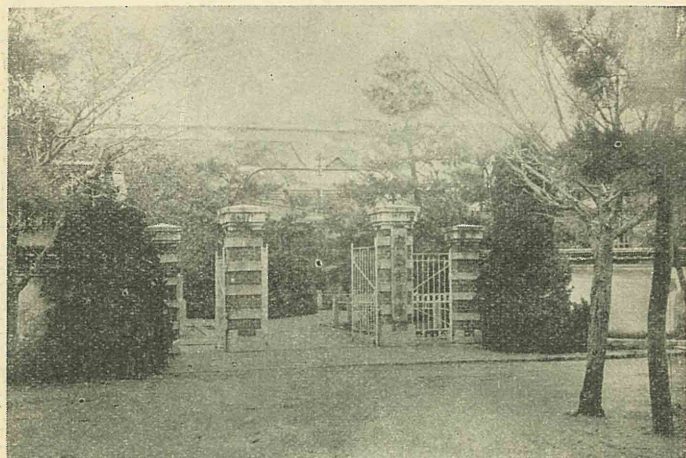
以上の組合員總數四萬二十人餘にして出資額は拂込濟額約六千九百四十八萬二千五百八十四圓となつてゐる。

市營産業施設

屠

屠場は市内福島町に在つて大正三年五月經費十一萬千餘圓を以て増改築せられたものにして、其の建物及機械器具は嶄新にして其の設備の整備して居ることは全國有數のものであつて衛生上より見ても斷然他都市に誇るべきものがある。而して昭和十年度中に取扱はれたる屠殺數量は牛、馬、豚合して一萬五千七百九十九頭、肉量七十三萬八千八百十九貫價格百八十三萬千九百一圓に達してゐる。

而して此の外本市所管外に宇品陸軍糧秣支廠に一ヶ所の屠場あり。



場

常設家畜市場は同じく市内福島町にあつて、大正三年六月經費二萬七千餘圓を以て建築せられ、畜産地として有名な島根縣、鳥取縣及山口縣、四國、北九州に隣接せる故を以て水陸共に交通至便なる本市に自然牛馬の集産夥しく之が一箇年間(昭和十年中)の營業收入は二萬二千二百二十四圓なり。

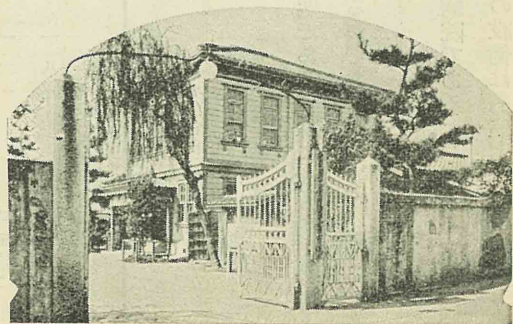
公設市場

市場は各都市が保健及社會政策の一として施設したものであるが、近時は等の施設を都市計畫の一として盛んに考察せられて居るのである。

本市の公設市場卸賣市場は目下研究問題として調査中であるが、市場設備としては唯小賣市場があるのみである。

公設小賣市場は大正九年物價最高騰時代に之が應急施設として三ヶ所開設したのに始まり其後食料品の精選と小賣市價の統一を目的とし終に永久的施設として改善増設せらるゝに至りたるも現在四ヶ所を開設せられて居る。

而して他面私設市場は年々増加し現在二十三ヶ所に達して居る。



場市畜家設常

公設小賣市場の名稱及狀況は次の通りである。

名	稱	所在地	開設年月日	店舗數	賣上高
東松原	公設市場	松原町	大正九年五月	一二戸	三六、六七二 <small>円</small>
大手町九丁目	公設市場	大手町九丁目	同 年六月	一二	四五、九二九
河原町	公設市場	河原町	同 年八月	一八	六二、九八五
天神町	公設市場	天神町	同 十二年十二月	八	三九、八九二

一二、保健衛生

衛生

都市問題の中心は都市生活に於ける保健と交通の問題である。殊に新興商工都市として合理的發展を期せんとする爲には保健政策上周到なる施設を要するのである。斯く考へ來ると本市の保健施設には今後益々改善を要する點が多いのである。

市立船入病院は傳染病及び其の疑ある患者の收容治療を主とする病院である。

大正八年建築費四十萬圓を以て起工し同十三年竣工したもので其の設備は病室七十九室あつて之を

普通、特別の兩種に分ち、特別室のみ有料とし他は無料としてゐる。而して治療、消毒及び防疫機械器具に至つては、近代醫療器具の粹を集め萬遺憾なきを期してゐる。

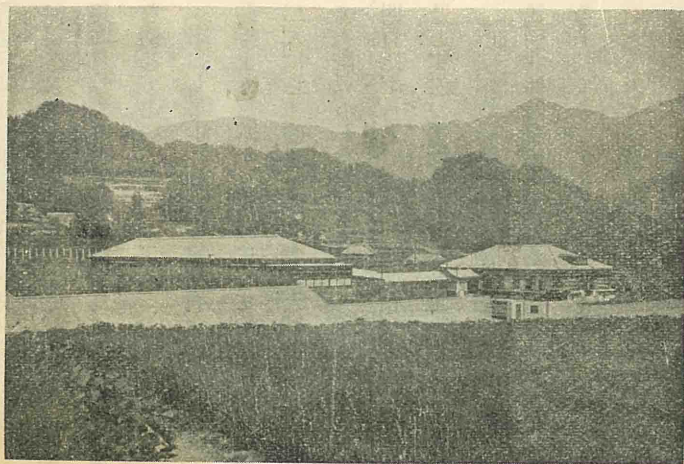
昭和九年中に於ける傳染病發生數は五百九十六人前年より百八十九人減にして内腸チブスは三百五十二人にして前年より七十六人減となつてゐる。而して入院收容した者は五百十三名にして全治した者は四百三十一名である。漸次市民の保健衛生思想の普及と相俟つて徹底的に之が驅除されつゝあり。

市立畑賀病院は結核豫防法に依據して設立せられ貧困其他の事情の爲療養の途の無い者を收容治療する病院であつて市外畑賀村に在る。

大正八年設置命令を受けて後昭和七年五月第一期工事に着手し、同八年九月竣工し、第二次工事は昭



市立船入病院・衛生試驗所



市立畑賀病院

和九年五月起工し同十年三月之が竣工を觀たのである。

而して其の設備概要に關しては病舎四棟を有し患者を輕症、中症、重症に三種別して總數六十人を收容することを得る。

其他レントゲン室、日光浴場、消毒場等近代醫學の粹を集め間然する所無きを期してゐる。

昭和十年度中收容したる患者數は九十三人にして前年よりの起員百十三人にして年末現在收容患者數は五十八人である。

衛生試験場は大正十五年市立船入病院の一部を充當して開設し、本市上水道の水質試験及び各種衛生上の試験、調査並に一般の衛生試験の依頼に應じてゐる。

昭和十年中の取扱に係る件數は三千二百四十六件

にして其の内有料試験は二千六百六十三件、之が料金二千四百六圓となつてゐる。

塵芥處分に就ては各都市に於ても未だ理想的方法が發見されて居ない状態であるが本市に於ては之を請負制度に依る賣却方法を探つてゐる。而して是等塵芥は海上數哩を隔てたる島嶼に肥料として搬出せられてゐるのである。本市は此の塵芥運搬の爲めに一ヶ年

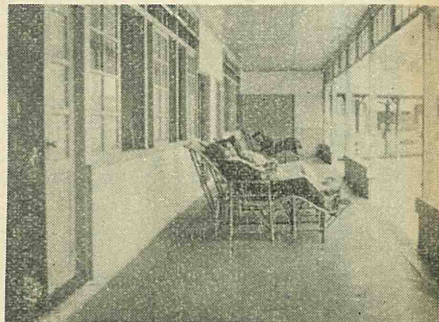
(昭和十年中)掃除延人員三萬四千四十五人を使用し之に衛生監視吏員二十四人を派し日々市内の清掃に努めさせてゐるのである。

昭和十年中に運搬されたる塵芥量は四千二百十三萬六千六百五十疋なり。

尿管處分は各都市共多大の經費を費して最も手を焼いてゐる問題である。

本市の尿管の約九割は、近郊農業者に依りて汲取られ、近時其の需要の無い中央部及び申込者に依つて一荷十錢にして汲取り之を三人村農會へトラック二臺を設備し一荷十五錢で賣却し亦島嶼部農民に賣却する等充分なる設備を以て處分し居れり。

本市の保健衛生設備は大略以上の如きものなるも其他衛生の連絡機關として衛生組合がある。本市



市立畑賀病院日光浴場

衛生組合は、明治三十一年縣令を以て衛生組合格則を定められ面目を一新し衛生組合としての基礎漸く鞏固となつたもので市内各町に涉つて洽く組合の設備を見るに至り現在二百八十九組合、約二千五百人の衛生組長、同副組長並に其他の役員あり市民の保健衛生の爲めに努力してゐるのである。

尙本市は火葬場二十七ヶ所あり理想的市營火葬場設置に關しては現在研究中である。

昭和十年中取扱に係る埋火葬認許件數は五千七十七件となつてゐる。

上 水 道

水道の創設 明治二十二年には宇品港の新築成り同年四月市制を實施し市勢の發展するに伴ひ飲料その他使用水の不便を感じる事甚だしく水道布設の議あり既に明治二十一年には私設水道會社設立の企てありたり。又當時市は勿論第五師團に於ても水道急施の必要を認め企畫を爲したる事あるも、奈何せん未曾有の大事業にして多大の工費を要し、市の財政之れを許さず具體化するに至らず、後同二十七年内務省御雇、英人バルトン氏の派遣を乞ひ實地調査を遂げ成案を得たり。時恰も日清戰爭勃發し廣島市は軍事上の根據地となりしが、飲料水の不良は忽ち全市軍人の旅宿に困難を感ぜしめたるのみならず多數艦船に要する飲料水の如きは遠く之を吳市に仰ぐの已むなきに至り、其の不利不便實に名狀すべからず、依つて市は最早一日も捨置くを得ず、同二十八年バルトン氏の計畫案に基き一部設

計變更の上豫算九十五萬圓の案を樹て認可を申請したり。然るに此の申請は其の儘却下せられ、同年臨時軍用水道布設部官制の發布を見るに至れり。依つて市は此の軍用水道に市の水道を接續布設し市民一般に給水するの許可を申請し、同二十九年許可を得、茲に本市多年の宿望たりし水道事業も實現の緒に就くを得たり。即ち明治二十九年五月起工同三十一年八月竣工、布設費總額軍用水道六十三萬九千八百四十五圓、市水道二十九萬四千六百六圓、給水人口十二萬人とし一日一人平均給水量七、〇七九立、一日總配水量八千五百立方米とす。斯くして此の軍用水道は廣島市に於て使用を許可され、市の接續水道と併せて單に廣島市水道と稱し、爾來市に於て經營することゝなれり。而して市内一般に給水を開始せるは實に明治三十二年一月なりとす。

第一期擴張 其の後本市は急速の發展をなし人口増加に伴ひ年々配水管の延長を行ひ給水に努めしが逐年の需要増加は早くも明治三十九年第一期擴張の必要を見るに至り、明治四十年三月工を起し翌四十一年三月竣工せり。其の工費十四萬五千五百九十四圓にして給水人口を十六萬人とし濾過池、配水池各一個並に取水唧筒、送水唧筒各一臺を増設せり。

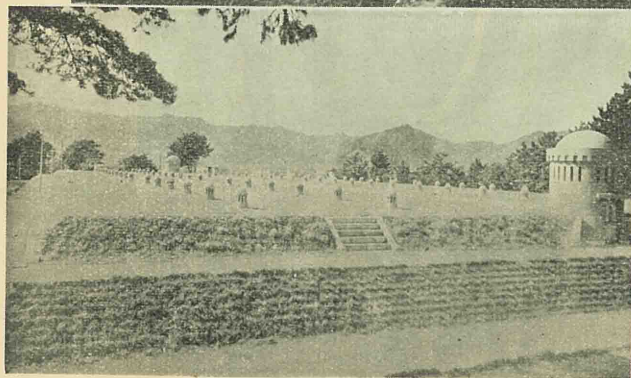
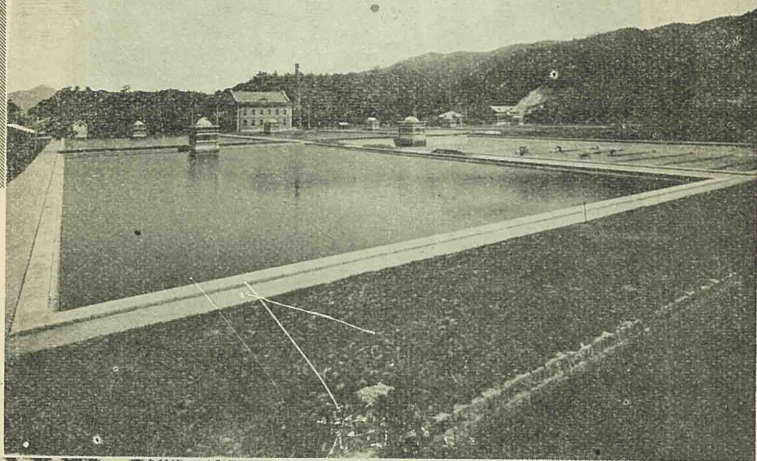
第二期擴張 爾後市勢は愈々進展し、殊に歐洲戰亂の勃發以來各種事業の隆興は一般文化的施設と相俟つて水道の需要益々増加し人口又増加し大正四年の頃には十六萬人に垂々とせり。殊に陸軍當局に於ても將來更に多量の給水を必要としたるを以て、大正四年第二期擴張を計畫するに至れり。此

の擴張に於ては市勢の發展と軍事上の必要を考慮し給水人口を二十五萬人と定め、更に一人一日平均給水量七、〇七九立なりしは實績を徴し過少なるを認めたるを以て九、九一一立に増加したる爲め著しく水量を増し舊に倍する大計畫となり調査の上成案を得實施に着手せんとせしが時恰も歐洲戰亂の影響を受け鐵管、セメント等の價格暴騰し爲に豫算の遂行困難となり遺憾ながら一時延期の已むなきに至れり。其の後大正七年秋に至りて休戰條約の報あり、物價漸落の機運に向ひたると給水益々不足を訴へ殊に軍事上の關係にあり、擴張の必要愈々切なるにより遂に大正十年工を起し同十三年竣工を見るに至れり、此の工費總額百十八萬九千七百三十圓を要したり。

第三期擴張

第二期擴張は大正四年調査開始より工事着手に至る迄六ヶ年の歳月を経過せる爲め

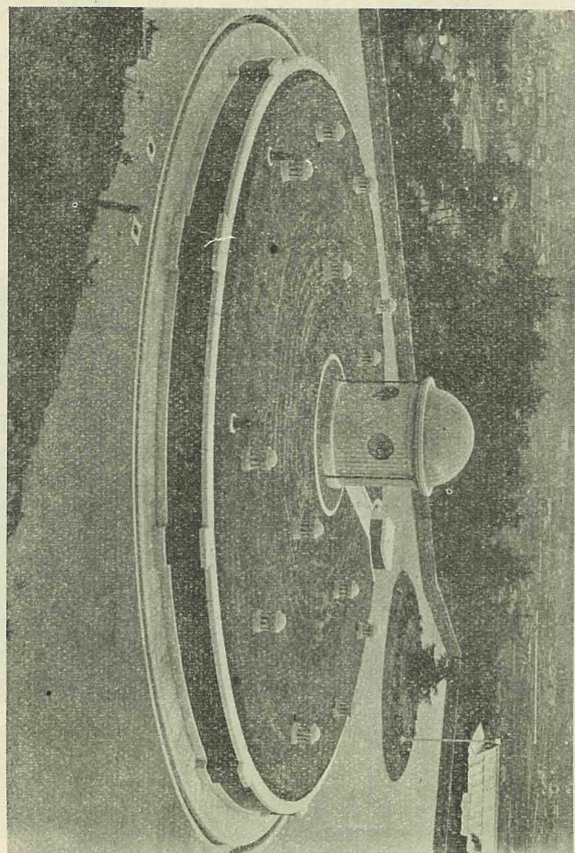
同十三年の竣工當時には人口概ね十八萬餘を算し一人一日當り實際給水量も亦増加し、計畫量の九、九一一立に對し一二、四三一立に上りたるを以て其の後遠からず給水不足を告ぐる虞あり、殊に昭和四年には隣接七ヶ町村を市に合併を見、人口は一躍して二十六萬餘を算するに至れり。依つて更に第三期擴張工事の必要に迫られ昭和四年立案、從來牛田町の取水場は太田川に於て年々河底の砂、砂利を採取せる結果河底の低下を見るに至りたる爲め夏季渇水時滿潮の際には時々幾分海水の影響し來る懸念ありたるが故に取水場を其の上流三軒原村に新設することとし、給水人口四十萬人、一人一日平均給水量九、九一一立を一二、七四二立に増加、昭和五年工事に着手、昭和十年三月竣工を見るに至



場水取村原（上）

場水淨（中）

池水配（下）



池 整 調 場 整 調 斐 己

れり、其の工費二百二萬五千四百六十六圓なりとす。

これに依り給水能力は充分にして保健衛生上に或は消火に意を安するに至りたるは、本市將來の爲め定に祝福する所である。

給 水 状 況

一、給水戸數及使用水量

種 別	給水栓數	給水戸數	使用水量 立方米	平均使用量	
				一戸一ヶ年 立方米	一戸一日 立方米
計 一般計量	三三、一九五	八、八〇三	三、四三八、七九三	三九七	一、〇七七
湯 屋	九二七	一三三	七、四〇八	五、八六四	一、六〇七
船 舶	四	四	一九、六七	四、九三	一三、四八
陸 軍	二、一八五	二	四、八二、一六三	一、七、三三〇	四七、一八
計 認 定 計	二五、四一〇	八、九六二	四、七、四三三	五、六	一、四四
放 定 計 量	九七一	九七一	—	—	—
專 用	四、五九五	三、九七六	—	—	—
公 設 共 用	四四四	三、五四	—	—	—
私 設 共 用	一、五〇五	八、九〇八	—	—	—
計 合 計	五二、五四三	五二、三〇八	—	—	—
計 合 計	七、七、九二五	六、三、一四二	—	—	—

二、配水量

年別	配水總量	一日配水量			給水人口	配水均量	配水最大量	配水最大時間
		最大	最小	平均				
大正十四年	九、四二八、〇七七 ^{立方米}	三九、四三四	一三、六三四	二五、八〇四 ^{立方米}	二七九、四五二	一、四四三 ^{立方米}	三、〇〇〇 ^{立方米}	一〇、六二二 ^{立方米}
昭和元年	一〇、五〇九、〇三五	三九、七四〇	一四、三九五	二六、七九二	一七九、七四四	一、四四三	一、〇〇一	一〇、〇一三
同 二年	一〇、五〇三、三五六	四二、六四四	一四、三九五	二六、七九二	一〇一、八九三	一、四四一	一、〇一一	〇、〇一七
同 三年	一〇、九四四、五五一	四一、三三八	一四、六七七	二〇、〇三九	一〇五、八六九	一、四四一	一、〇〇一	〇、〇一四
同 四年	一一、八五五、一三七	四三、九七九	一四、六六六	三三、四二六	一一一、〇一〇	一、四五三	一、〇〇一	〇、〇一七
同 五年	一二、四三三、六三三	四六、〇〇〇	二一、五五七	三三、四二六	一一一、〇一〇	一、五五三	一、〇〇一	〇、〇一四
同 六年	一三、七〇〇、五二二	五二、三七三	一七、四二八	三三、七〇七	一三六、九六五	一、六六三	一、〇〇一	〇、〇一六
同 七年	一五、三〇一、六三三	六〇、三四〇	二四、七〇八	三三、七〇七	一三〇、八六九	一、八二二	一、〇〇一	〇、〇一八
同 八年	一四、九九九、六三三	五五、八八五	二七、三二二	四四、〇九五	一三九、八七三	一、七七一	一、〇〇一	〇、〇一六
同 九年	一六、五九二、九二四	六一、五三三	二〇、八八九	四四、四二〇	一四七、〇七四	一、八二二	一、〇〇一	〇、〇一四

下水道

本市の下水道は明治三十一年上水道と並行して之れが建設を企圖せられたが財政其の他の理由に依り延期せられ、同四十一年三月五ヶ年繼續事業として起工せられ、後國庫補助等の關係に依り七ヶ年繼續に變更を見るに至り、大正五年五月總工費百四十六萬三千餘圓を以て竣工したのであるが、其の延長は十四萬五千一百一十一米、排水面積五百九十二萬七千平方米、其の工事の主要は次の如きものである。

構造 は總て土管及び鐵筋混凝土管を以てせられ平均六十米に一箇の人孔及び燈孔を設置して居る。下水管の内徑は最大幅員二米、水深一米七の暗渠及び〇、八米乃至〇、〇二米の土管、混凝土管を流量の多寡に依つて數種の口徑のものを使用して居る。

側溝 道路上及び沿道家屋の雨水を直に下水道に導く爲め其の兩側軒下に幅員〇、二四米、深さ〇、〇九米の側溝及び内徑〇、一五米の雨水引入管を築造し約三十六米毎に一箇の雨水枿を設置して本管と連絡せしめて居る。

各戸下水汚水（一日一人平均水量一〇立と推定）雨水（一時間二十五耗の降雨を標準）は暗渠式に依り公道以外は各戸の經費を以て戸毎或は數戸共同で下水管に連絡せしめて居る。公設枝管（内徑〇、一二米）の延長は四萬五千四百八十米である。

抽水場 本市の北部は高燥であるが、南部新開地方面は低濕にして下水の自然流下に依る排水が不可能であるので此の方面に六ヶ所の抽水所を設けて汚水、雨水の疏通迅速を圖ることとして居る。

而して下水道完成後の掃除方法には多大の注意を拂ひ、年々修理改善及び下水道の擴張を圖つて居るが現在（昭和十年末）に於ては幹支線の延長二十六萬三千三百十二米、各戸接續管延長六萬五千九百六十一米、其の排水面積七百四十九萬七千三百二十八米に及び抽水所十一ヶ所を數へてゐる。

昭和四年四月隣接町村の合併及び逐年市勢の發展に伴ひ人口三十一萬餘に達したる現在に於て下水道の擴張は急務中の急務にして目下關係者に於て調査研究中である。

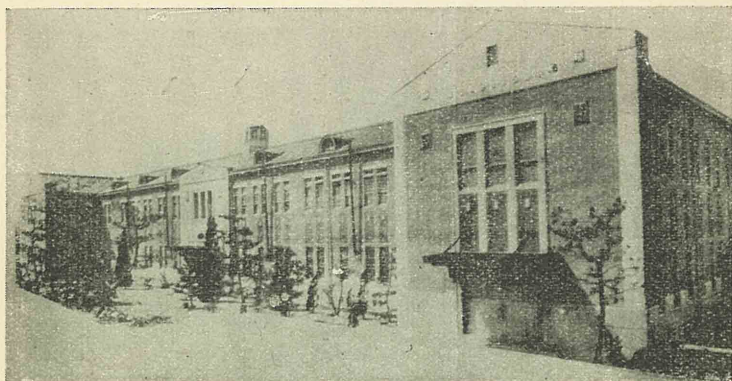
一三、教 育

本市は位置、風土、民俗等環境が教育に適して居るので各種の教育機關が備り夙に教育都市としても克く知られて居る。

今其の概要を記述すれば次の通りである。

初等教育の現在（昭和十年四月末）小學校數三十九校（官縣私立五校を含む）にして其の内尋常小學校三校、尋常高等小學校三十四校、高等小學校二校にして之が兒童數市立小學校の分を示すに四萬一千二百三十六人、學級數七百七十六學級、教員數八百七十二人である。

中等教育は現在中學校七校、高等女學校八校にして其の内官立一校、縣立一校、私立四校、高等女



市立高等女學校

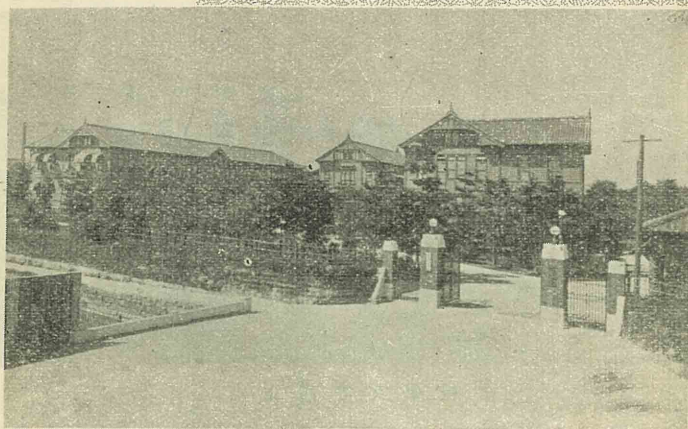
學校縣立一校、市立一校、私立六校（内一校休校）にして生徒數は中學校五千二百四十一人、教員數二百二十八人、高等女學校生徒數五千六百五人、教員數二百二十八人となつて居る。

實業教育は現在市立實業補習學校二校及び市立商業學校一校、縣立一校、私立三校、合計五校が在り其の生徒數三千六百九十二人、教員數百五十六人となつて居る。

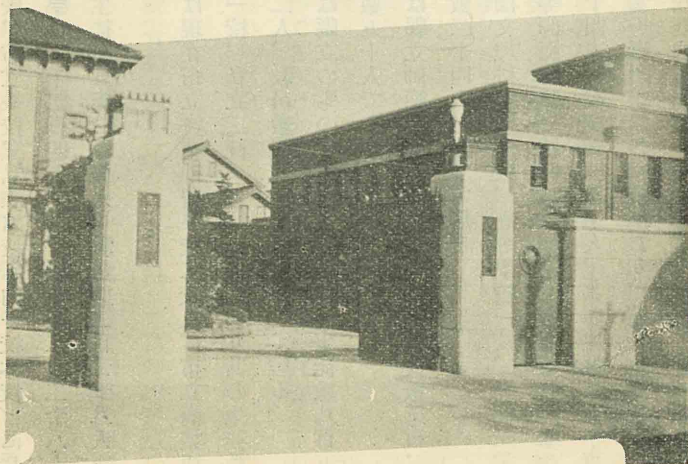
工業學校は縣立のもの一校であつて其の生徒數八百五十六人、教員數五十人である。

師範教育は縣立師範學校一校にして其の生徒數三百二十七人、教員數二十四人となつて居る。

高等教育は文理科大學一校、高等學校一校、高等工業學校一校、高等師範學校一校にして何れも官立で其の學生數一千九百五十四人、教授數三百一人、其の他縣立女子專門學校、私立女子專門學校各一校があり、其の生徒數四百四人、教授數五十八人となつて居る。



廣島高等工業學校



廣島文理大學

特殊教育として縣立盲學校及び聾學校各一校があり、其の生徒數二百八十人、教員數二十一人となつて居る。

其の他は各種學校四十二校がある。

社會教育を施す機關として市立淺野圖書館及び其の他に同じ市立圖書館が七館と文理科大學附屬圖書館がある。

市立淺野圖書館は舊廣島淺野家の創立に係り經營せられて居たもので昭和六年本市に全部を寄附せられ同年十月市立圖書館として開館するに至つたものである。

而して其の藏書數は五萬八百五十一冊にして之が一箇年間の閱覽人員五萬四千三百六十八人にて新聞閱覽人員二十萬八千五百四十六人となつてゐる。

尙ほ青年學校は三十五校、男女青年團各三十二團あつて各社會公民教育の爲め其の使命に邁進して居るのである。

一四、社會事業

社會事業は所謂社會的に不幸なる人々に對する保護救濟及び福利増進を目的とする事業であるが、



市立中央職業紹介所

本市に社會課が設置せられたのは僅か十餘年前の事であり、従つて本市の社會事業施設には尙ほ幾多の改善を要し進歩を圖らねばならぬ點が多いので現在着々其の機能を發揮すべく努めて居るのである。

尙ほ本市所管の社會事業施設を列記すれば次の通りである。

職業紹介所は従來市の東西に一箇所づつ在つて其の全能を擧げて居たのであるが更に昭和八年市の中央地點に従來の二箇所を集め而して之が新築を計畫し昭和九年十月工費三萬二千圓を以て千田町三丁目電車軌道に面し白堊二階建のものを建築したのである。

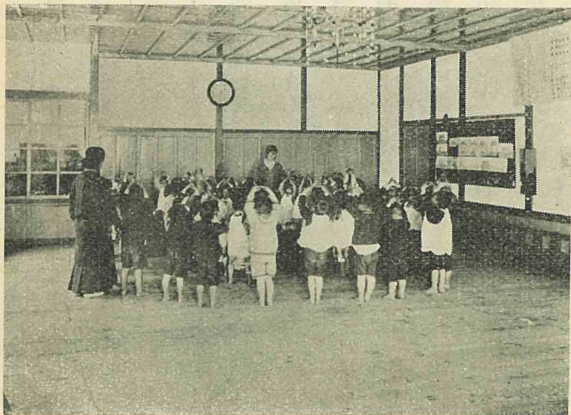
而して昭和十年中の取扱數は求人一萬三千七百十三人、求職九千九百五十二人、就職三千六百九十一人となつて居る。

託兒所は少額所得者の幼兒（三歳以上學齡期迄）を晝間保育するを以て目的として居る。本市の經營する託兒所及び昭和十年度中現在員席數は次の通りである。

東隣保館託兒部	一〇八人
西隣保館託兒部	二〇二人
草津託兒所	一一〇人
仁保託兒所	八〇人
楠那託兒所	五〇人
廣瀬託兒所	六〇人
江波託兒所	四七人
三篠託兒所	六八人
荒神託兒所	四九人
廣島海上託兒所	三五人

尙ほ本市所管外に公私託兒所が六箇所ある。

隣保館は大正十三年二月融和事業施設の必要を認め市内東西に各一箇所（尾長町及び福島町）に建設せられた



市立託兒所

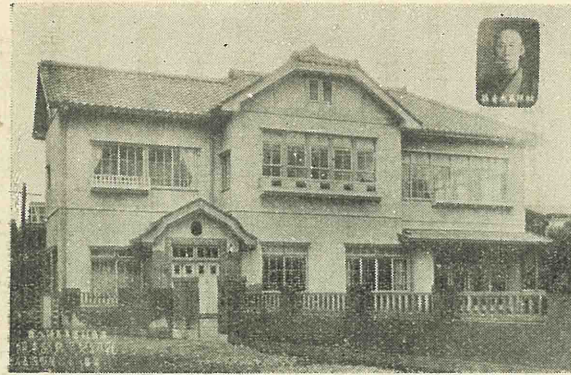
ものである。

而して其の事業の主なるものは託児、簡易圖書閲覧、人事相談、講演及び講習等にして保健衛生上

より住居宅の改良にも意を注ぎ善隣教化の實を擧げつゝあるのである。

従つて之が利用人員も年々増加の傾向があり、昭和十年度中の總延人員は東西を合し次の通りである。

圖書閲覧	二、五一四
人事相談	二、三三七
講演講習	四、五三八
諸集會	二、五九六
兒童指導	七、九四七
保健衛生	二二、九四六
慰安娛樂	三、五九五
其他	八、七七九
合計	五四、五一五

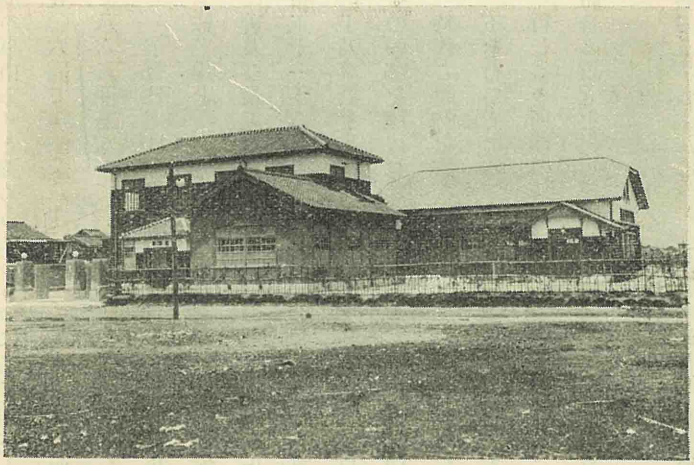


廣島社會事業婦人會乳兒保育部

尙ほ本市所管外の隣保事業施設として宇品町に財團法人喜清會宇品學園があり、同方面の善隣教化に盡して居る。

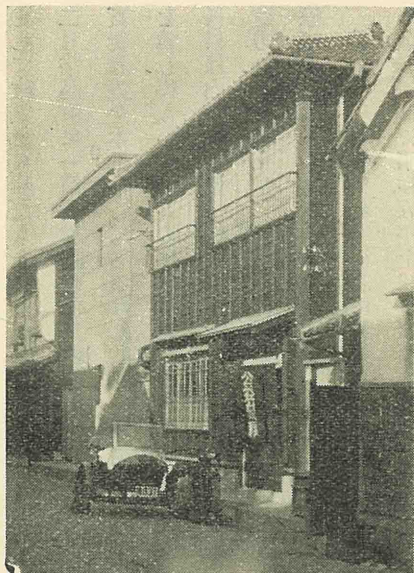
診療所は昭和四年九月少額所得者の醫療救護施設として設立せられたもので東西二箇所なりしが本年二月宇品町に一箇所増設して三箇所となつてゐる。實費診療を本則として居るけれ共其の醫療費の納付を爲し得ない貧困者には之を無料として居る。診療科目は内科其の他一般醫療診斷で調劑は之を行はず處方箋のみを交付して居る。昭和十年中に於ける診療延人員は

公益質屋も亦少額所得者に對する安全且つ簡易なる金融機關で昭和五年十二月東西に各一箇所設立せられ執務時間は午前八時より午後九時迄とし貸付金額は一口に付き十圓以上一帯五十圓を限度とし利



宇品學園

率は一箇月百分の一、二五、流質期間を六箇月とし特別の事由ありと認められるものは之を延長することとして居る。昭和十年中に於ける貸付金額は八二、五〇六圓で辨済金八四、〇六一圓流質金額三四、八六五圓となつて居る。



市立公益質屋

市營住宅は歐洲大戰後人口の都市集中化と住宅難との結果住宅補給と都市衛生の維持改善及び最近に至つては家賃の低廉化の爲に大正十一年六月より同十五年七月迄に低利資金十八萬圓を借入れ八十六戸を建築し其の目的の一部を達成したのであるが、昭和五年四月時代の趨勢を鑑み一律に約二割方の家賃の値下を行ひ更に本年一律に一割五分の値下を斷行し益々所期の目的に向つて進んで居る。

而して之と並行して住宅補給解決の一助として住宅組合の設立を指導獎勵し現在にては三十組合員がある。

保養院は本市に於ける行旅病人及び同死亡人、精神病者及び救護法に依る救護收容は從來私設機關

に委託收容して之が救済をして居たものを直接本市に於て收容救護する機關であつて昭和八年度に於て豫算八萬四千七百餘圓を計上して之が建設を計畫し施療救護の目的を達せんとして居る。

尚ほ其の他本市所管外の公私設社會事業團體は次の如きものである。

- 廣島養老院 (養老事業)
- 廣島社會事業婦人會 (乳幼児保育事業)
- 乳幼児保育部 (乳幼児保育事業)
- 廣島修道院 (育兒事業)
- 廣島育兒院 (育兒事業)
- 宇品學園 (隣保事業)
- 福島町一致協會授産場 (授産事業)
- 尾長町協和會授産場 (授産事業)
- 廣島無料宿泊所 (宿泊救護事業)
- 樂石社廣島支部 (異常兒保護事業)



廣島修道院

廣島保護院 (免囚保護事業)
縣立廣島學園 (感化事業)

一五、都市計畫



廣島本通り

都市計畫事業

産業の發達に伴ふ人口の都市集中は近代都市共通都市計畫は都市の完全なる發達及び合理的向上を期する上に於て最も重大なる現在に於ける各都市共通の都市問題の中心を成して居るのである。

本市は大正十二年七月都市計畫法の施行と共に一大都市計畫を企圖し漸次之が具體的進展を計つて居るのである。従つて之が

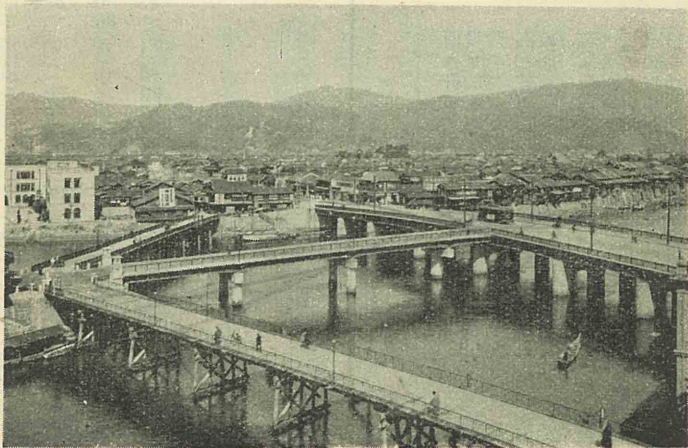
實現の上は交通、保安、衛生、經濟上に及ぼす市民の福利増進は實に偉大なるものがあると信ずるのである。

以下其の區域、地區、地域、街路等に付き大要を記述すれば次の如きものである。

區域は本市の全地域にして廣袤東西一萬二千二百二十七米、南北九千六百一十米、面積六千九百八十八萬四千二百四十四平方米(四万五千三百三十三畝)である。

地區は本市に於ては市街地建築物法に據る地區の指定は現在ないのである。

地域は都市の分業的組織に依り商業地域(概ね市内中央部)、工業地域(市内東部及び南部、北部の各一部)、住居地域(概ね前記商工業地域を除いた部分)に分つたもので昭和二年六月指定せられたものである。



相生橋宇字橋

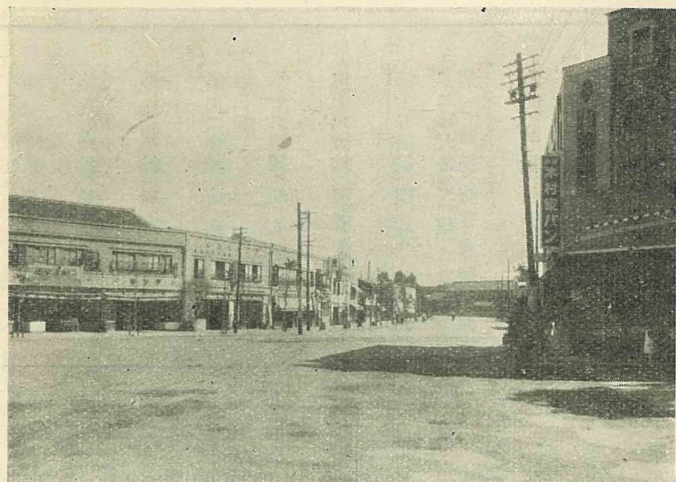
街路計畫に定められた路線は二十九線にして工費約四千萬圓を要し現在一時に之が工事に着手することを許されない事情にあるを以て財政の許す範圍に於て先づ廣島驛と廣島港との船車連絡近郊新開地に街路の根幹を示し區劃整理の施行と相俟つて亂雑不整な市街化を未然に防止する等緊急缺く可からざる路線十五線を選び此の工費千三百八十餘萬圓にして昭和四年度より同十四年度迄の十一箇年繼續事業として計畫し昭和五年より事業施行中である。

事業施行決定の街路は次の通りである。

都市計畫事業街路

街路名	幅員	區
イ、一、二等大路第三類 第二號線(十日市荒神町線)	二 十五 米 (一部二十二米)	西九軒町ヨリ鍛冶屋町ニ至ル 及ビ的場町ヨリ荒神町入口ニ至ル(新架橋ヲ除ク)
第四號線(十日市己斐線)	二 十二 米	西九軒町(第二號線ノ起點)ヨリ己斐町ニ至ル區間
第五號線(十日市横川線)	二 十二 米	西九軒町(第二號線ノ起點)ヨリ横川町三丁目ニ至ル區間
第六號線(小網町江波線)	二 十二 米	小網町第四號線ヨリ分岐シ船入町ヲ經テ江波町長通ニ至ル區間

第七號線(的場宇品線)	二 二十 米 (一部二十米)	的場町第二號線ヨリ分岐シ段原大畑町ニ至ル 右折シ皆實町ヲ經テ宇品町市營棧橋ニ至ル區 間
第八號線(船入皆實線)	二 十 五 米 (一部二十二米)	大手町八丁目ヨリ南竹屋町及京橋川新架橋ヲ 經テ皆實町ニ至ル的場宇品線ニ接續スル區間
第九號線(船入御幸橋線)	二 十 二 米	皆實町(御幸橋東詰)ヨリ的場宇品線ニ接續ス ル(専賣局東南側)區間
第十二號線(廣島驛前線)	二 十 二 米 (驛前ニ廣場ヲ設ク)	大須賀町ヨリ第二號線終點ニ至ル區間
第十三號線(船入梅屋線)	二 十 二 米	觀音町九五二番地ノ一ヨリ同町南七〇四ニ至 ル區間
第十四號線(觀音十日市線)	二 十 二 米 (一部十五米)	西觀音町二丁目五間道路ヨリ船入梅屋線ヨリ 分岐シ天満町ニ至ル區間
第十五號線(觀音町線)	二 十 二 米	觀音町ニ於テ船入梅屋線ヨリ分岐シ二等大路 第一類第二號線ニ接續スル區間
ロ、二等大路第一類 第二號線(皆實東新開線)	二 十 六 米 (一部二十六米)	船入皆實線終點ヨリ皆實町三ノ割ニ至ル區間
第四號線(己斐草津線)	二 十 五 米 (一部十五米)	己斐町ヨリ草津南町ニ至ル區間
ハ、二等大路第二類 第二號線(荒神町大須町)	十 五 米 (一部二十米)	荒神町ヨリ大洲町ニ至ル區間
第九號線(荒神町矢賀線)	二十米至二十四米	荒神町



む望を 通町田千りよ近附橋野鷹

而して

事業路線延長 二萬五千百十四米八
 現在竣功路線延長 九千十六米六
 となつて居る。

土地區劃整理

本市は其の南部に二百五十萬坪の廣潤平坦なる郊外地を有し市勢の膨脹發展は主として郊外地に延長し家屋を建築するもの益々増加の趨勢に在り。然るに是れ等の郊外地は土地の區劃概ね亂雜にして道路狭少且つ其の數少く排水又完全ならず。宅地としての利用上不適當なるのみならず自然の發展に委するときは到底規格ある市街地を構成する所以に非ざるを以て夙に區劃整理の必要を感じ大正十五年以來之れが助成に努めたる結

果近時一般に區劃整理を理解するに至り、既に組合を設立せるもの及び申請中のものを併せ十四地區約百二十一萬坪にして全市郊外地中の一半以上は既に着手したるものと云ふを得べし。其の他は市街地化の趨勢に鑑み緩急に依り漸次全郊外地の區劃整理を完了し以て統制ある市街地構築の基礎を定むると共に市勢の發展を促進せんとす。

然して其の概況は左の如し。

工事完了

總地積 五十九萬二千九百三十六坪

事業費豫算額 四十七萬五千五百五十二圓

工事未着手

總地積 六萬四千二百八十坪

事業費豫算額 四萬千六百九十三圓

設立認可申請中

總地積 二十八萬四千五百七十七坪

事業費豫算額 二十三萬二千九百六十五圓

設立認可申請準備中

總地積 六萬四千八百九十二坪
 事業費豫算額 五萬九千四百七拾一圓
 組合設立同意勸誘中

總地積 二十萬三千三百三十七坪
 事業費豫算額 十五萬四千四百七十六圓

公園

本市には次の如き公園がある。

比治山公園は純然たる山林公園で其の山容が恰も虎の臥して居る如き形をして居るので臥虎山の別稱がある、其の面積十六萬四千餘平方米にして南北に蜿蜒し、満山老樹鬱鬱として其の風景最も閑雅である、山嶺は眺望浩濶にして市街を變眸に收めることが出来る。

南方遙に廣島灣を望み近く字品、江波の風物を指摘することが出来る、山の北端は之を開いて平地とし垣々數千頃、其の一部に舊御便殿及大正天皇御即位大典記念館を建設し又山上北西に櫻花を植ゑ陽春開花の候には花を賞し銷夏林間の涼風に一日の汗を忘れ、紅葉秋月を詠むの候には杖を此の地に曳く者跡を絶たず、満山銀を敷き連樹雪に惱むの風情に至つては蓋し他に其の比を見ない所である。

昭和三年攝政宮殿下行啓記念事業として公園路改築の工を起し（園内舊御便殿注連繩柱前より蜿蜒多開院下に至る道路）同年竣功したものである、其の他に陸橋及兒童遊園地及市内義俠家の手に依つて成された廣場等林間公園としての設備を漸次整へるに至つたのである。

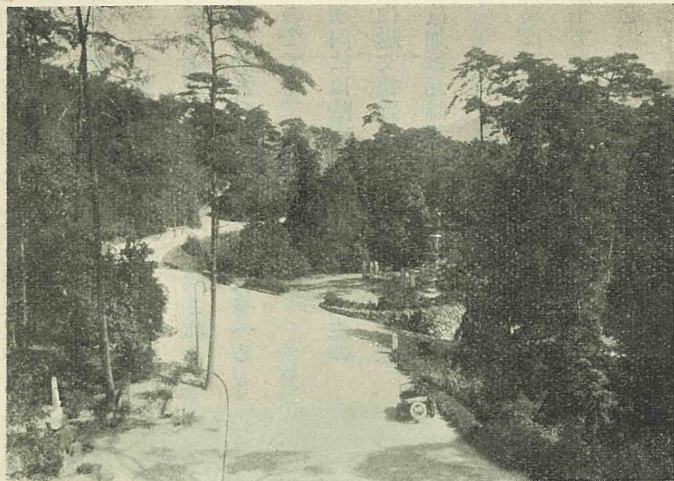
尙同公園内には陸軍墓地及頼家諸先生の墓所、頼山陽文徳殿、故早速大藏大臣銅像があり又故加藤元帥銅像も建設せられて居る。

江波公園は市内江波町に在り其の面積三萬四百餘平方米であつて全山古松鬱茂し、殊に三方を海に繞らし山嶺の眺望最も爽快を極め東は廣島港及比治山を展望し、西南

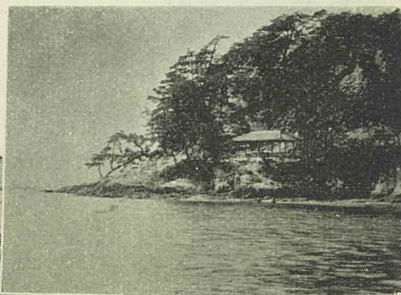


比治山公園の一部

は風光
明媚な
る廣島
灣に臨
んで安
藝の小
富士、
繪の島
辨天島
嚴島等
烟波の
間に縹
渺し近
く白鷺
の波に



比治山公園の一部



大芝公園



江波公園

七四

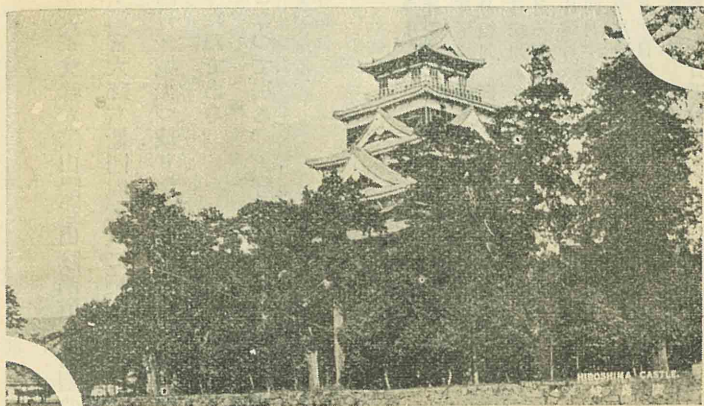
戯れるの風情に至つては到底筆舌には現し難いものがあるのである。

大芝公園は市内三篠本町の東端太田川の清流に沿ふ堤防敷町の間に在つて其の面積三萬三千七百平方メートルにして櫻花の候を以て克く知られて居る。

一六、史蹟名勝

大本營址 日清戦役の際、明治二十七年九月十五日畏くも大森を此の地に進めさせ給ひし時行在所に充てさせ給ひ翌年四月二十七日迄萬機を統べさせ給ひし聖蹟にして舊廣島城本丸址即ち第五師團司令部であつた建物を其の儘に御利用あらせられ其の調度の御質素なることは拜觀者をして襟を正さしめ感激に咽ばしむるものがある。

現在廣島縣の管理に屬し監視警護を嚴重にして一般人に拜觀を許して居る



廣島城址

七五

里程は廣島驛より約二千五百米である。

廣島城址 鯉城、在間城、**當磨城**、石黒城等の別稱があり天正文祿の際山陽、山陰兩道九箇國の領

主毛利右馬頭輝元の築く所である、天正十七年四月輝元より二宮太郎右衛門尉就辰に築城總奉行を命じて董役せしめ同月十五日「鋤初の式」を行ひ天正十九年四月牙城先づ成り輝元高田郡吉田より宗族重臣を隨へて城に入り慶長四年正月十四日竣功の賀儀を行つたのである。

現在に於て舊態を存するものは天守閣と城廓の一部のみとなつて居る、天守閣は五層にして東西二十二米南北十六米、高さ三十三米巍然として冲天に聳えて居る。

尙歴代の城主を挙げれば次の如くである。

毛	利	輝	元	(七箇月間在城)	(天正十九年四月入城)
					(慶長五年十月長防三州に削封、長州萩に移る)
福	島	正	則	(十八年同)	(慶長五年十月尾州清洲より移封、同六年三月入城)
					(元和五年六月襪封、同年七月信州高井野邑に移る)
淺	野	長	晟	(十三箇月同)	(元和五年七月紀州より移封、同年八月入城)
					(寛永九年九月三日逝去)
同		光	晟	(七箇月間同)	(寛永九年十月襲封)
					(寛文十二年四月十八日致仕)
同		綱	晟	(十箇月間同)	(寛文十二年四月襲封)
					(延寶元年正月二日逝去)
同		綱	長	(三十五箇月間同)	(延寶元年二月襲封)
					(寶永五年二月十一日逝去)

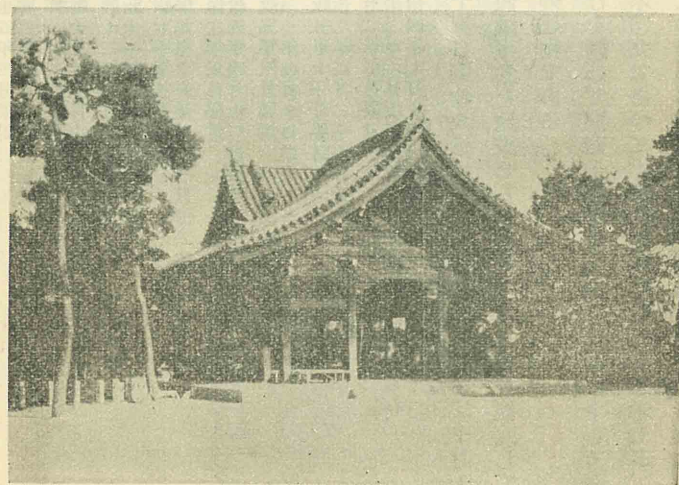
同		吉	長	(四十二箇月同)	(寶永五年三月襲封)
					(寶曆二年正月十三日逝去)
同		宗	恒	(十一箇月間同)	(寶曆十三年二月二十一日致仕)
					(寶曆十三年三月襲封)
同		重	晟	(七箇月間同)	(寛政十一年八月二十一日致仕)
					(寛政十一年八月襲封)
同		齊	賢	(三十一箇月同)	(天保元年十一月二十一日逝去)
					(天保元年十一月襲封)
同		齊	肅	(四十七箇月同)	(安政二年四月十二日致仕)
					(安政五年四月襲封)
同		慶	熾	(六箇月間同)	(同) 年九月十日逝去
					(安政五年十一月襲封)
同		長	訓	(三箇月間同)	(明治二年正月二十四日致仕)
					(明治二年正月襲封)
同		長	勳	(二箇月間同)	(明治二年六月版籍奉還、廣島藩知事に任ぜられ、 明治四年七月十四日廢藩置縣に至る)

比治山舊御便殿 明治二十七年日清戦役の際九月十五日明治大帝大轟を本市に進め給ひ、十月十五日臨時第七回帝國議會を廣島に召集し、西練兵場に假議事堂を建設せられ十月十八日車駕親臨して開院の式を擧げさせ給ひし時御便殿に充てさせられし御建物である。

翌年平和克復の後、本市は永久記念の爲之が拂下げを請ひ、同四十二年十月地を此處に卜して奉遷したものである、御建物は桁行二十米四五、梁行九米〇九であつて本市は之に桁行三十二米七二、梁行十二米七二用材榑白木の上覆建物を造營し奉安したのである、殿前の大華表は、明治大帝御大葬の



殿 便 御 舊



館 念 記 典 大 位 即 御

時、東京市青山齋場殿に建てられ大正二年二月東京市に下賜せられたものを本市に譲受けて此處に建立したものである。

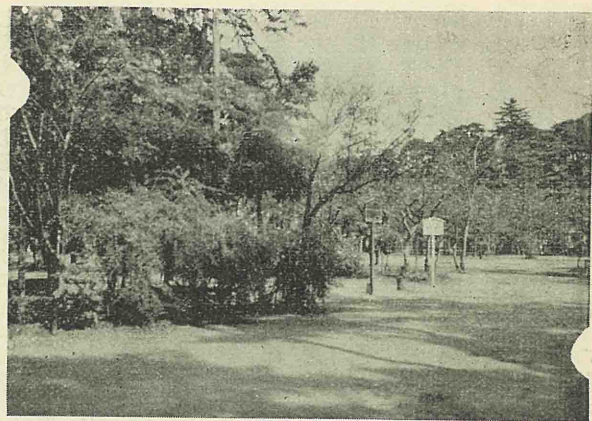
御即位大典記念館 大正四年大正天皇御即位大典の禮を擧げさせ給ふや、本市は國家最高の典儀を永遠に記念する爲、大正七年比治山公園に繪馬堂式大記念館を建立し、大祭祝日等の際市民の遙拜所として居る。

泉邸(縮景園) 市内上流川町の北端に在つて、舊藩主淺野家の別邸である、元和五年淺野長晟入國の翌年造成したもので別稱を泉邸と謂ふ。

園景の全部を支那西湖に模したりと謂ふので縮景園の名があるのである、面積三萬九千六百六十九平方米であつて、奇石珍木配置の巧妙なこと、五歩にして其の趣を異にし、十歩にして其の景を移し、閑雅幽邃なること宛然仙郷に遊ぶの感がある。



(園 景 縮) 邸 泉



饒津公園

園内の大書院を清風館と言ふ。
明治二十七年車駕行幸あらせ給ひてより屢々高貴の方
を御迎へ申した所である。
尚園の西南隅に観古館あり淺野家の家寶を陳列して一
般の觀覽に供して居る。

里程は廣島驛より九百八十二米あり。

明治天皇御飲料の井泉 縮景園内にあり、明治二十七
八年戦役の際、駐輦八箇月の間日常供御の清水を此の井
泉より採らせられたものである。

饒津神社 市内二葉の里二葉山麓に在り、天保六年安
藝守淺野齊肅祖先追孝の意を以て造營せられしものにし
て、太祖淺野長政夫妻及幸長、長晟公を祀る、境内敷地
二萬一千八百八十八平方米あり、結構宏壯にして西に神田
川の清流を控へ背後に綠樹鬱蒼たる二葉山を負ひ頗る雅
致に富む明治五年二月社格を縣社に列せられて居る。
里程は廣島驛より約千三百米である。

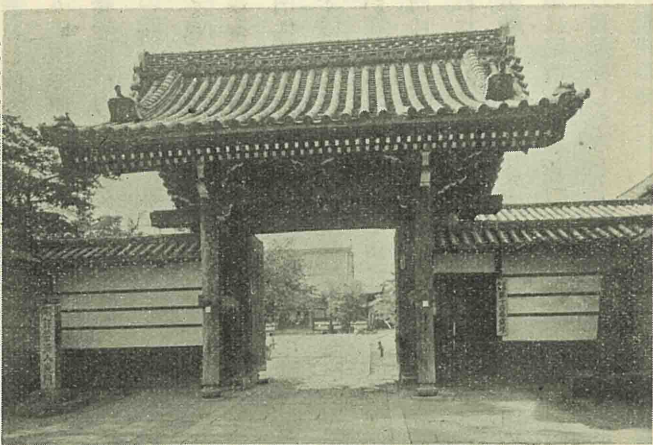
二葉の里 大須賀町の西北隅に在り現在は町名を
二葉の里と稱ふ。

其の大半は饒津神社の境内にして、北は二葉山を
負ひ、西南は神田川の清流を控へ、古松老杉鬱茂し
て枝を交へ、梅櫻楓樹亦其の間を點綴して幽閑の風
趣に富んで居る。

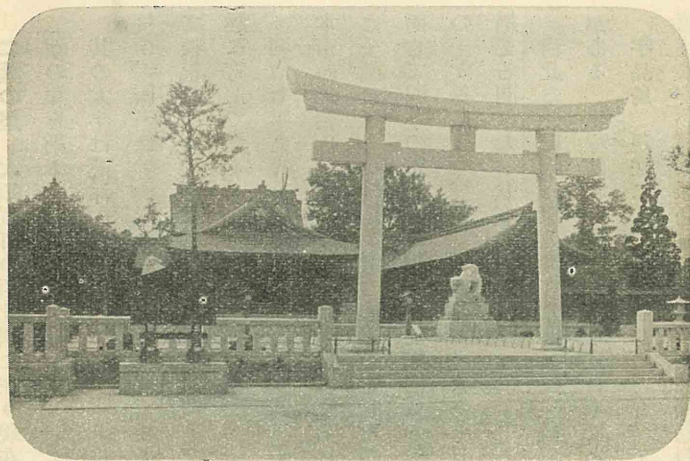
明治七年九月公園地となつたが、同三十一年八月
本市が比治山、江波の兩公園を新設するに及んで縣
は公園を廢して饒津神社の境内地としたのである、
而して四季の遊客常に絶えず艶陽四月の候には遊覽
の士女殊に多く、又初秋萩殊に名があり日夜遊客の
絶える間のない状態である。

尙此の外に太宰原天満宮及明星院、鶴羽根神社等
がある。里程は廣島驛より約千三百米である。

宇品島 現在に於ては元宇品町となつて居るが、
舊時は安藝郡仁保島村に屬し、宇品築港の後、明治



國泰寺



廣島招魂社

三十七年十月本市に編入したものである、全島老樹繁茂鬱蒼し稀有の古代原始林である、島脊に觀音院があり眺望絶佳である。

國泰寺 市内小町に在り、宗派は曹洞宗にして僧惠瓊の開基に係り文祿年間朝鮮木を以て建立せりと謂ふ、後三度の祝融に遇ひ舊態は存せざるも尙結構壯大なるものがある。

境内に豊國神社並豊公遺塚の塔及淺野公數代の墓標、赤穂義士大石良雄の室石東氏及大石大三郎の各墓石が在る。

寺内に天然記念物として指定されたる樟三樹あり
里程は廣島驛より約二千七百五十米あり。

官祭廣島招魂社 は現在西練兵場西南に在り。

神靈は明治維新より明治十年戊申の役に至る迄の皇國の爲獻身したる七十八柱の英靈及明治十年以後幾多の戦役事變に際し護國の精魂と化したる三千餘



賴山陽舊居

柱の英靈を合祀して居る、社殿の結構近郊に其の比なく神苑は太田川の清流に臨み老松灌木を以て蔽ひ神嚴なる小公園化せしめんとして居る。

里程は廣島驛より約二千三百米である。

賴山陽の舊居 市内袋町に在り、一世を指導し維新回

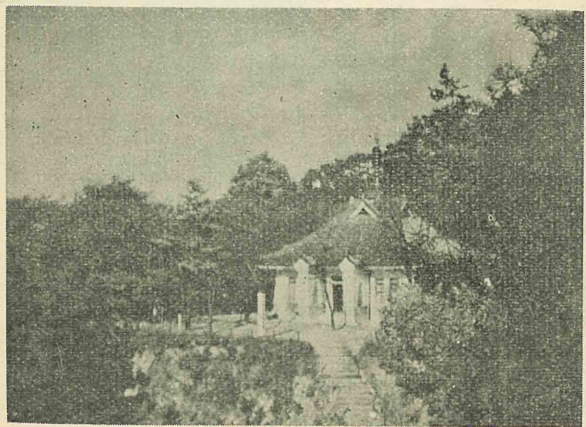
天の大業の源を成したる「日本外史」を著述せられた居室等當時のまゝを保存して居る。

里程は廣島驛より約二千七百三十米である。

賴山陽文德殿 比

治山公園の山腹に在

り、賴山陽先生百年祭を記念する爲に廣島市單獨の事業として計



山陽文德殿

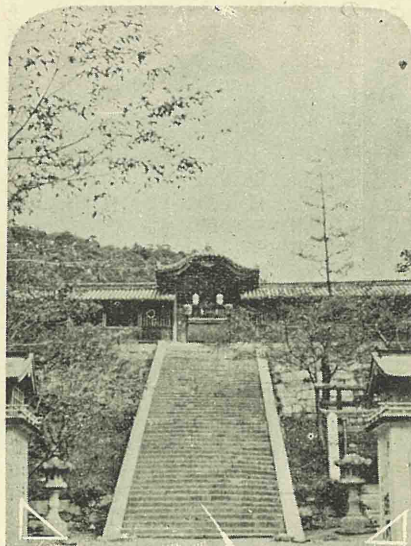
畫し山陽文徳殿建設翼賛會の努力により完成、昭和九年十月十五日の竣工である、殿内には縣下出身の青年彫刻家、富樫政人氏の丹青に成る先生の聖像が安置されてある。

賴家諸先生の墓 賴山陽の父春水を始め賴家一族諸先生の永眠の地である毎年一回有志によりて祭

典が行はれる。

觀喜松 山陽文徳殿の境内に在り、樹齡千年の老松、此の地は元安養院觀喜寺の在りし地である、取り残されたる老木に昔の名残りを止めて名刹の遺跡を物語つて居る

東照宮 市内尾長山の中腹に在り、天保年中藩主淺野光晟の創建に係り、徳川家康の靈を祀るところである、境域五千三百平方米あつて社殿は南面し石階五十一段ある



東照宮

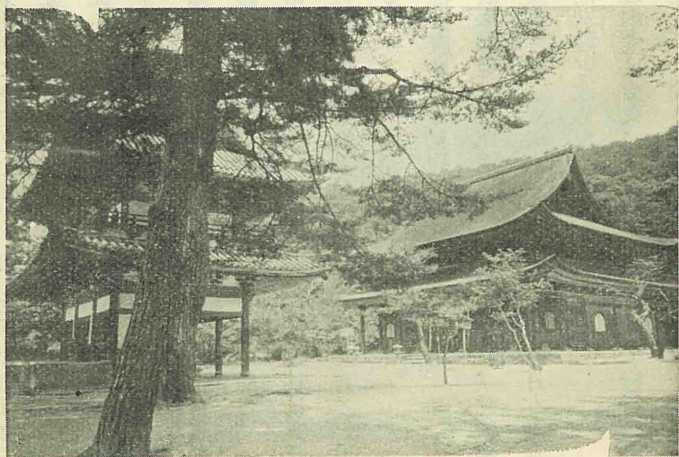
社殿の結構壯麗を極め往時は祭禮頗る盛大であつたと謂ふ。

石階の下參道の兩側に櫻花の竝木があり陽春の候には賞遊を試る者絶間が無い。

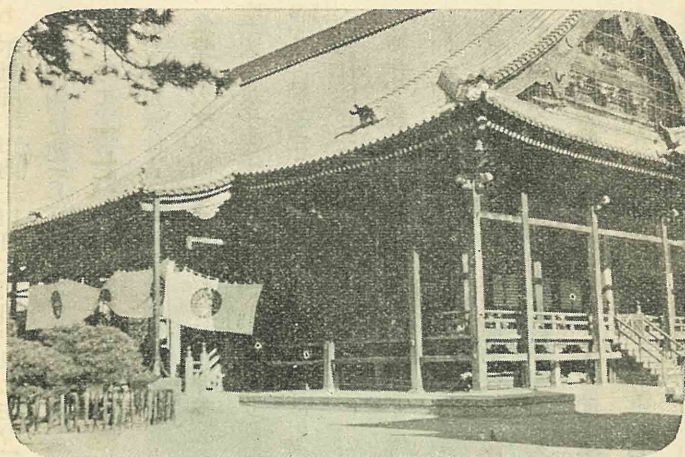
里程は廣島驛より約千九百米である。

不動院 市内牛田町太田川左岸に在つて、足利尊

氏が諸國に建てた安國寺の一にして、僧惠瓊が殿堂、方丈、書院、厨庫等を建て之を再興したものである、宗派は古義眞言宗仁和寺の末寺であり、其の金堂は天文年間の建立にして、天井畫龍の落款に、「天文庚子冬十月日僧永怡筆」とあり國寶となつて居る、純乎たる唐様禪宗建築重層入母屋造にして、全體は低き三和土の壇上に立ち、軒は上下共に二重扇垂木、組物上層は三手先の詰組、下層は三斗組、梁間五間の内正面一間開放となつて居ることは禪宗の佛殿としては珍らしく、四面には棧唐土と華燈窓とを設け、内部は土間、中央に須彌壇がある、天井は中央鏡天井にして、永怡の天人、龍の畫がある。其の他は總て化粧屋根裏を露出し、其の自由な構造に大に見るべきものがある。内部の柱、虹梁肘木、



不動院



本派本願寺廣島別院

太瓶束等總て極彩色を用ひ、此の建物には後世の補修多分に加はつて居るけれど、確に室町時代禪宗建築の傑作の一に數えられる。

本尊藥師如來坐像は國寶であつて藤原時代典型的の作品である、梵鐘は(銅製)一には形式上は普通の朝鮮鐵にして何れも國寶に指定せられて居る。

太田川の歸帆を眺め春は櫻、夏は瀧、秋は茸狩、紅葉狩一日の行樂地として賽客跡を絶たざるの風景である。

里程は廣島驛より約三千米。

本派本願寺廣島別院 市内寺町に在り、元は龍原山佛護寺と稱して居たが明治四十一年四月本派本願寺廣島別院と改めたものである。

その本堂は文久二年再建のものにして桁行二十間餘、梁行十八間餘であつて市内寺院中第一のもので

あつて、眞宗安藝門徒の大本山として約八萬の善男善女が讃仰の本として居る。

一七、官公衙其の他

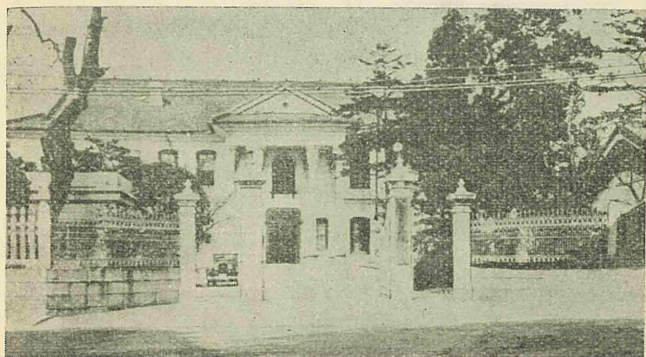
廣島縣廳 明治十一年建築したるもので市内水主町に在り構内廣く縣會議事堂、武徳殿及縣立廣島病院等相隣接し名園與樂園は其の裏にあつて春季に最も佳し。

里程は廣島驛より約三千二百七十米あり。

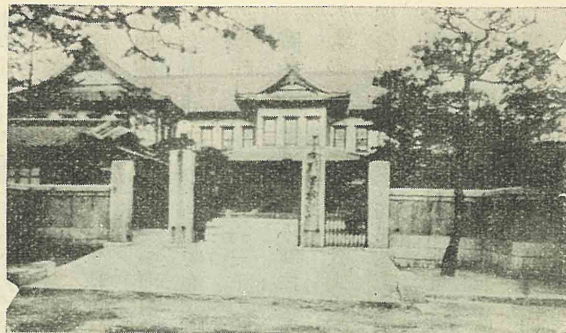
廣島控訴院 市内小町に在り、明治十九年五月設置せられたもので其の管轄區域は岡山、山口、廣島、鳥取、島根、愛媛の六縣であり管内に地方裁判所六、區裁判所三十九ある。

里程は廣島驛より約二千七百三十米ある。

廣島地方裁判所 市内三川町に在る、明治十四年の建築にして其の管轄區域は廣島縣一圓にして、吳、尾道に各支部がある。

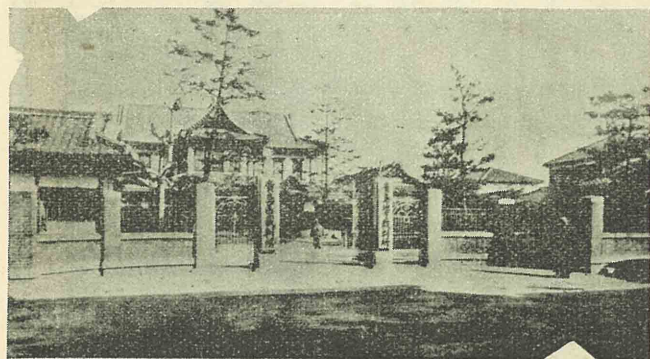


廣島縣廳



廣島控訴院

里程は廣島驛より約二千三百米あり。
廣島區裁判所 廣島
地方裁判所構内に在り、其の管轄區域は廣島市及佐伯、安佐、山縣、安藝各郡の本市に接せる一部を直轄して居る。
廣島刑務所 市内吉島町に在り。
廣島文理科大學 市内東千田町に在り、昭和四年四月の開校にして、文科、理科に分れて居る。



廣島地方裁判所同區裁判所

尙附屬圖書館及南隣して博物館がある。

里程は廣島驛より約四千六百六十米あり。

廣島高等師範學校 市内東千田町に在り、明治三十五年の開校にして文科、理科、教育科に分れ構内に附屬中學校、同小學校を併置して居る。

里程は廣島驛より約四千四百四十米あり。

廣島高等工業學校 市内南千田町に在り、大正九年一月の開校にして、電氣、應用化學、機械、醸造の四科に分れて居る。

里程は廣島驛より約四千八百米である。

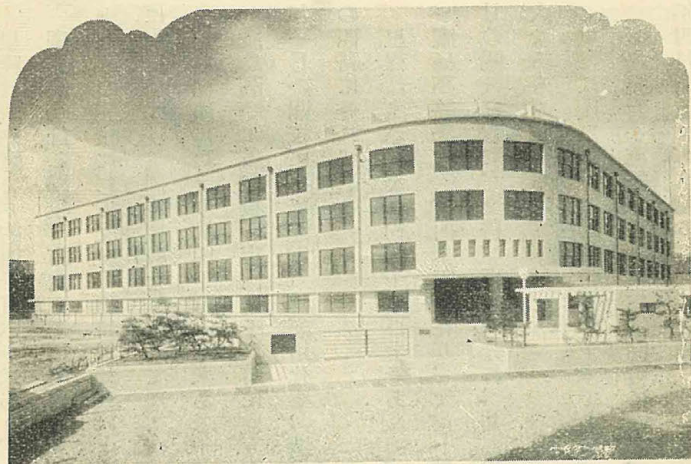
廣島高等學校 市内翠町に在り、大正十三年十二月の開校にして、文科、理科に分れ、其の規模最も大なるものがある。

里程は廣島驛より約二千八百八十米である。

廣島縣女子專門學校 市内宇品町に在り、昭和十一年四月開設せられたるものである。



第五師團司令部



廣島遞信局

第五師團司令部 舊廣島城廓本丸址下にあり。
 里程は廣島驛より約二千五百米あり。
 歩兵第九旅團司令部 市内基町西練兵場東北側に在り。

里程は廣島驛より約二千米あり。

陸軍運輸部 市内宇品町に在り。

廣島聯隊區司令部 市内基町西練兵場東北側に在り。

廣島偕行社 市内基町に在り。

廣島憲兵隊及同憲兵分隊 市内基町に在り。

廣島陸軍兵器支廠 市内宇品町に在り。

廣島陸軍被服支廠 市内出汐町に在り。

宇品陸軍糧秣支廠 市内宇品町に在り。

廣島遞信局 市内基町に在り、昭和七年三月起工
 同八年四月竣功し總經費四十四萬圓で白色四階建近

代式建築物である。

里程は廣島驛より約千二百米である。

廣島郵便局 市内細工町に在り、本市に郵便局

(初めは郵便役所と稱して居た)を設けられたのは明治四年十二月であつて初めは市内平田屋町に在つたのを同二十六年四月現在の地に移轉せられたものである。

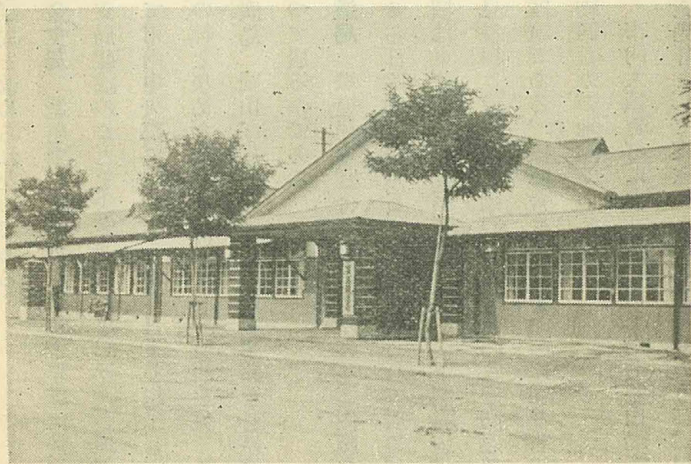
廣島驛前郵便局 市内大須賀町に在り、廣島驛に隣接して居る。

宇品郵便局 市内宇品町に在り、明治二十七年八月設置せられたものである。

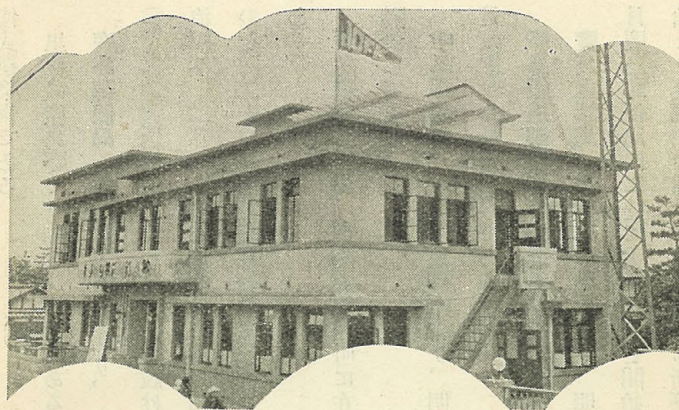
廣島鐵道郵便局 市内大須賀町に在り。

廣島電話局 市内下中町に在り、明治三十四年二月廣島郵便局内に於て電話交換を開始せられたるに始まり後現在の地に移轉し廳舎も新築せられ名稱も

廣島電話局 市内下中町に在り、明治三十四年二月廣島郵便局内に於て電話交換を開始せられたるに始まり後現在の地に移轉し廳舎も新築せられ名稱も



廣島鐵道局假廳舍



廣島放送局

亦廣島電話局と改められたのである。

廣島貯金支局 遞信當局に於ては昭和十年度に於て本市に貯金支局建設のことを決定せられ之が建設敷地も千田町にして市内中央部に昭和十一年六月より起工し近代建築様式の粹を集めたる廳舎も遠からず實現を見ることとなり、廣島、岡山、鳥取三縣下の貯金事務を管轄することゝなつて居るのである。

廣島鐵道局 鐵道局本廳舎の建設せられる迄假廳舎を新築設置せられ昭和十年八月より閉局せられて居る、之が管轄區域は東は山陽本線明石驛より西は下關驛迄、山陰線は石見益田以南西、四國の全線及關門及宇高連絡船に屬する區域である、假廳舎は市内宇品町に在り省線宇品驛より約四百米の地點である。

廣島驛 市内大須賀町に在り、明治二十七年山陽鐵道株式會社廣島驛として設立せられたものであるが、現在

の廳舎は大正十一年八月工費五十二萬餘圓を以て建築せられたものである、一日の乗降客一萬五千六百八十人である。

横川驛 市内横川町に在り。

己斐驛 市内己斐町に在り、本市西玄關口として重きを成して居る。

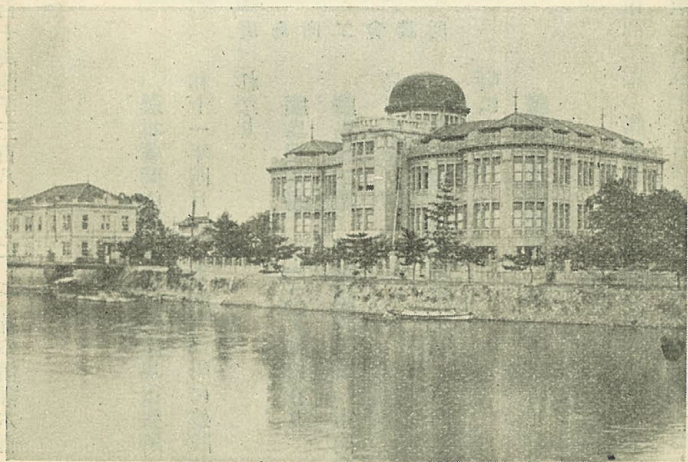
隣接して宮島線電車西廣島驛がある。

省營バス廣島自動車所 市内三篠本町一丁目に在り。

廣島稅務監督局 市内八丁堀に在り、廣島、岡山、鳥取、山口、愛媛六縣下の稅務行政を管轄して居るのである。

廣島稅務署 市内八丁堀に在り。

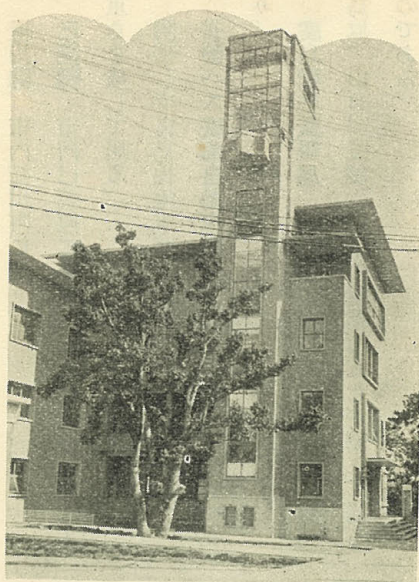
廣島地方專賣局 市内皆實町に在り、現在職工數千三百十九人で一箇年間（昭和九年度）の製造高は



廣島縣産業獎勵館

刻煙草百九十八萬九千五百四疋、兩切煙草二十五億七百十萬四千三百八十本にして此の價額六百十四萬八千九百八十圓となつて居る。

神戸税關廣島出張所 市内字品町に在り。



廣島商工會議所

農林省岡山米穀事務所廣島出張所 昭和十一年四月一日市内大州町に建設せられたり。

廣島營林署 市内八丁堀に在り。

廣島縣工業、同醸造試驗場 市内東白

島町に在り。

廣島水産試驗場草津支場 市内草津南

町に在り。

廣島商工會議所 市内猿樂町元安川畔

に在り。

廣島縣産業獎勵館 市内猿樂町元安川畔に在り、本市商工業の指導及商品陳列裝飾等の展示並斡旋等に盡瘁して居る、一箇年間（昭和九年度）の開館日數三百五十九日、展示及即賣出品點數一萬九千

五百十四點、之が縦覽人員十九萬五千五百四人、一日平均五百四十三人が入場して居る。

廣島縣病院 市内水主町に在り。

日本赤十字社廣島支部病院 市内千田町二丁目に在り。

廣島中央放送局 市内上流川町に在り。

〔附〕市立各廠一覽

字品出張所	廣島市字品町一、三〇二、二
公會堂	同 國泰寺町二〇三
船入病院	同 舟入幸町六五〇
衛生試驗所	同 舟入幸町六五〇船入病院内
畑賀病院	安藝郡畑賀村
屠場	廣島市福島町
常設家畜市場	同 福島町
東松原公設市場	同 大須賀町一、〇八四、三
大手町九丁目公設市場	同 大手町九丁目三三二

天神町公設市場	廣島市天神町官有
河原町公設市場	同 河原町一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
東 診 療 所	同 荒神町二六六
西 診 療 所	同 西觀音町一丁目二、二〇三ノ一
中央職業紹介所	同 千田町三丁目
勞働紹介所	同 千田町三丁目
東 隣 保 館	同 尾長町四〇三ノ五
西 隣 保 館	同 福島町四〇〇ノ一
草津託兒所	同 草津東町三九四ノ四
仁保託兒所	同 仁保町一〇八ノ三
廣瀬託兒所	同 廣瀬町二〇二ノ二
江波託兒所	同 江波町五三二ノ一六
三篠託兒所	同 楠木町二丁目三三三
楠那託兒所	同 仁保町六一八
宇品海上託兒所	同 元宇品町水面

東公益質屋	同 稻荷町八二ノ一六
西公益質屋	同 天満町一九二ノ一
水道部基町分室	同 基町二
水源 地	安佐郡戸坂村
浄水 場	廣島市牛田町一、八九六ノ三

昭和十一年十二月廿五日印刷
昭和十一年十二月卅一日發行

廣 島 市 役 所

印刷人 增田計雄
廣島市大手町七丁目壹番地

印刷所 增田兄弟活版所
廣島市大手町七丁目壹番地
株式會社
電話三三三・五八三番

